中學新國文 卷八

4a
810
昭7

41724
教科書文庫
4
810
41-1932
20000
67985

文部省檢定濟
昭和七年八月二十四日　中學校國語漢文科

資料室

中學新國文 巻八

文學博士 笹川種郎 編

広島大学
教
67985
図書

株式會社 帝國書院 發行

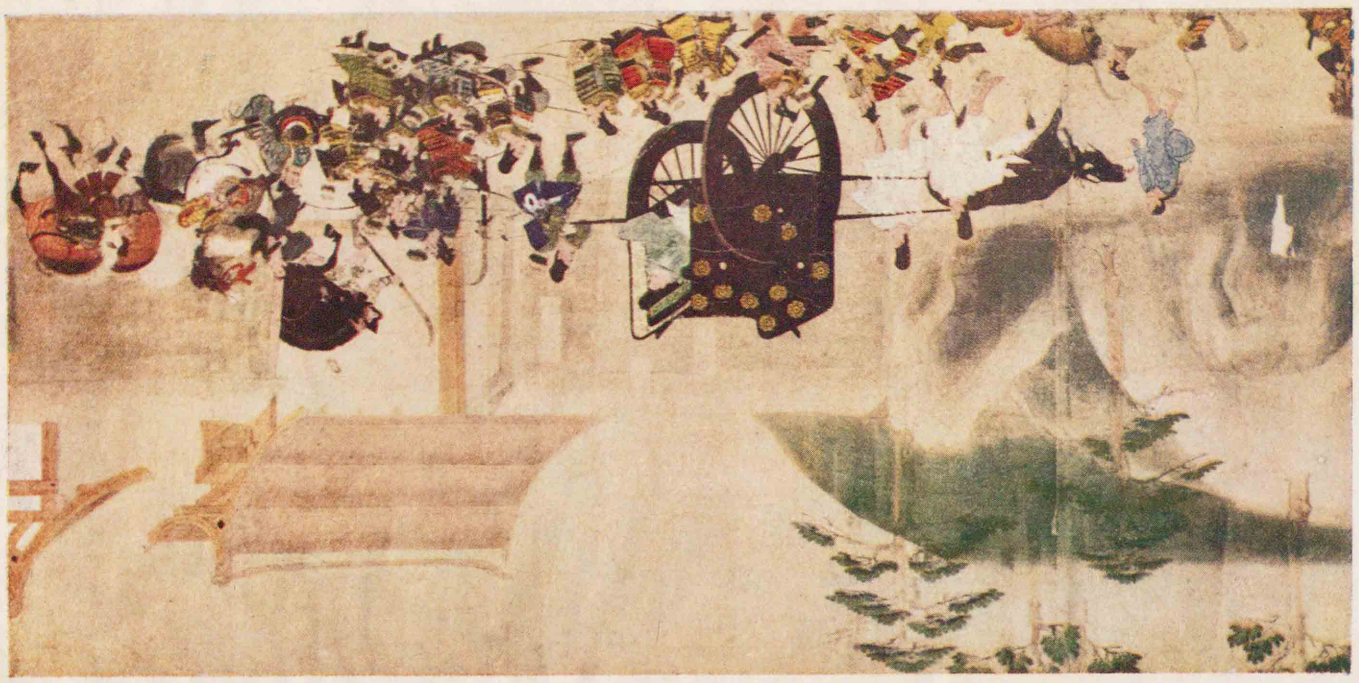
4a
810
昭7

卷八　目次

一　歌僧西行　藤岡作太郎　一
二　白銀の猫　上田秋成　八
三　百蟲譜　横井也有　一四
四　明月　二〇
五　壽永の秋　（平家物語）　二三
六　平家の沒落　高山樗牛　二六
七　流泉・啄木　（今昔物語）　三〇
八　樂聖ベートーヴェン　中澤臨川　三五
九　男性美　笹川臨風　四五
一〇　桐一葉　坪内逍遙　四九
一一　霧　豐島與志雄　六一

一二 ロンドン塔　夏目漱石　六六
一三 光頼參内（平治物語）　七一
一四 待賢門の戰（平治物語）　七八
一五 兵衛佐兒鎧　竹田出雲　八六
一六 元日　夏目漱石　八九
一七 兼好のことば（徒然草）　九四
一雪の朝　九四
二花と月　九五
三なきあと　九六
四鼎法師　九八
五和漢朗詠集　一〇〇
一八 雪　一〇〇
一九 ワイマールより　藤代禎輔　一〇三

二〇 ゲーテとシルレル　森鷗外　一一一
二一 欣求　川路柳虹　一一四
二二 愛兒の死　西田幾多郎　一一七
二三 山庵雜記　北村透谷　一二四
二四 透谷を憶ふ　島崎藤村　一二九
二五 作ることと見ること　岩城準太郎　一三四
二六 おなじ湊
二七 嵯峨と大原　一三九
二八 國家の獨立　岩城準太郎　一四三
二九 建國の歌　穗積八束　一五三
三〇 蒙古來　北原白秋　一五六
　　徳富蘇峰　一六〇



（第十四課參照）

（雷風慶吉作）

目次

緒論

中學新國文　卷八

藤岡作太郎

一　歌僧西行

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しうし、鎌倉・室町の世、「抑〻歌道において定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり」といはれし時、稱讃の聲また定家に讓らず。近世に至つて、定家の價値いたく墜落したれども、山家集の一書は、なほいかなる歌人の机邊をも去らず。西行の名いまに嘖々たるは抑〻何の故ぞ。

俊成　藤原氏　俊忠の子　千載集の撰者

定家　藤原氏　俊成の子　新古今集撰者の一人

西行法師、俗名は佐藤義清、鎭守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術を善くす。和

西行法師（扶桑隱逸傳）

歌に堪能なるは蓋しその天禀なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されども、義清は榮利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機に就いては、或は傳へて曰く、「嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參朝せんとて、約に隨ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立ちさわぎ、内には人の泣きかなしむ聲きこゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、『殿は昨夜頓死したまへり』とて、若き妻、

老いたる母の、重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、『棄恩入無爲』は如來の教なりと觀じ、四歳の女が、父の歸れるを喜びて取縋るを、思ひ切りて緣より下に蹴おとし、これこそ愛着の絆を斷つはじめぞと、顧みもせで家を遁れ出で、嵯峨の里に至りて剃髪せり」と。かくて名を西行と改め、また圓位といふ。出家せし時保延六年にして、歳正に二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて、高野にこもり、吉野に隱れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、「桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし」と。一笠・一杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺これを惡み、弟子に告げて曰

保延　崇德天皇の御字

右幕下　右大將源頼朝

大師　弘法大師

文覺　俗名は遠藤盛遠

く、「遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事あるべからず。數寄を立て、此處彼處に嘯きありく條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし」と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の参りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ」と問へば、「西行と申すもの」といふ。文覺手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて、明障子を開けて出づ。暫しまもりて、「年頃承り及びたるに、御訪ね悦び入り候」とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子達は如何なる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸り去りしかば、「日頃の仰に違ひたるは」と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、言ひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずるものの面やうか。文覺をこそ打たんずるものなれ」といへりといふ。

文覺上人

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて、次の一首を詠じぬ。

ねがはくは花のもとにて春死なん
そのきさらぎの望月の頃

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せしが、幽契違はずして、建久元年二月十六日、七十三歳にて入滅せり。その和歌を集めたるもの、卽ち山家集なり。

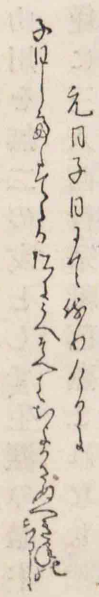
我が國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、

版本山家集

建久 後鳥羽天皇時代

山家和歌集上

春



宗祇
連歌師

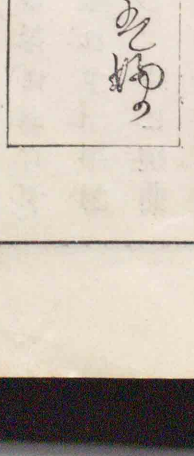
山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅に三人、西行・宗祇・芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離のをりをも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乘じて、また西行・宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各その道に一期を劃せし三家が、いづれも亦風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行が如何に詩人の吟囊を肥やすものなるかを知るべし。

抑平安時代の貴紳・淑女は、僅に賀茂・桂二川の流域數里の間を己が世界とし、海をも見ぬ天地に跼蹐して、足、畿外に出でず、一生の經過きはめて單調に、感情を刺衝するものなければ、隨つて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化

西行筆蹟

を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、ただ同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承し行けば、和歌の思想、辭句の上にも、自ら典型を生じて天眞を忘れ、實情を欺き、虛僞に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その內容は空しく、滔々として風を成せるとき、西行ひとり蹶起して從來踏襲せし典型を簸却し、みづから山水の間に逍遙して、直接に自然隱微の聲を聽き、感得するところは萬朶の花と咲けり。

平安朝の末に於ける崇德院の御製が、時に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠じ給へることの、世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、



一字一句皆己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲嘖々として、天成の大才と許さるゝも、また宜ならずや。

西行は實に生まれながらの歌よみにして、歌を作る者にあらず。天籟吹ききたつて松濤卽ち鳴る、その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦强し。時に婉曲の響あれども、ことさらに人爲の巧を加へざれば、天成の詩美は、千歲の下、愈〻光を增して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。

（國文學全史）

上田秋成

二　白銀の猫

鎌倉の大將源頼朝

文治それの年八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる人々、御前おひ、御あとべつかうまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず、遲からず、つらを亂さずねり出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、かしこみたいまつれる人數多あるに、お前はらひして「あな」とだにいはせず、世にいかめしく貴き御有樣なり。かへりまをして御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のもとに畏りをる法師のあなるが、見上げ奉るつらつき、なほ人ならずと思しけん、御輿ぞひの若侍して問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたる樣して、「雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す」といふ。聞召されて、「さればこそ聞知りたれ。穴熊のたけき獲物の類ならで、賢き人得たるためしに誘ひかへらん。わがあとに連れて來れ」と、召連れさせ給へり。

御館に入らせられ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあまた照らしかゞやかせ給ひて、おまし近き處の一間なる簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔、嶺姑射の山の宮仕せし人の、世をはかなきものに思ひなして、身は黑うやつれたれど、月花の

なげきの譽は、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。弓取る人のもとの心のたけきには、よむ歌も直くあからさまと聞くはまことか。武士のあら〳〵しき心には詠みうつし得まじきものに宮人達は沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛・鼓の音、馬のいなゝき物とも思はぬを、この三十文字あまりのまなびには心の後るゝはいかに。」

「こはかしこき御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢とらして、軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛くすくよかに、調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まんとては、益荒雄心をとり隠し、あてになよびかに詠みうつすべくするこそこの道のいみじき煩なれ。君が御心のとくたけきまゝにうちいで給はんには、今の人誰かは立並び奉らん。三尺の剣を執りて『大風起り、雲飛揚す』とうたひ、槊をよこたへて、『烏鵲南に』と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや」と云ふ。

大風起り　漢高祖詠
烏鵲南に　魏曹操作

「人々、あれ聞き給へ。世は捨てたれど、たのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓矢の上手となんきこゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても教へ承るべし。」「こは益荒恐ある御問はせなり。つは者の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの痩法師にさへ、物問はせ給ふことのかたじけなさよ。むかひ奉りては、をこがましく、家の傳なりなどきこえ奉るべうも覺え侍らず。ましてありがたき大宮仕をいなみ奉り、親のいつくしみをさへあだなるものにして、年纔に二十三にて家を出でたるいたづら者の弦ひき一つだに心にとゞめしことも侍らず。たゞ一言の忘れがたきは、『賞を重くし、罰を輕くせよ』といひしと、『任ずる者を辱むれば危し』といひしとのありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは、人の心をよく買ひなすと雖も、誠の情より

とも覺え侍らず。寵を減じて人を危きにおとし入るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出したまへることの、おやしきまでかしこくませるを、餘所ながら見聞き奉るには、この御問ゆるさせ給へ」とて、額を板敷に摺りつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ「口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今は果してん。人々と土器とりはやし、曉かけて遊ばん。まれ人は酒飲まざるべし。鹿・猿のなかに立交りて歌よめといふともよむまじ。たゞわが前に遊べ。風冷かなるにも飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は、暖かにもこそ。この火取、法師に參らせよ」とて、白銀もてつくりたる猫のかたちしたるを取傳へて「君より賜ふ」とて、前に置きたり。「鹿・猿はなほ心たけし。鼠をだにえとらぬ痩法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ」とて、三度おしいた

西行と銀の猫（前賢故實）

だきぬ。

あした御暇たまはりて立ちいづるに、御館の人やどりに、誰が殿のわらはべならんくゝり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、「これ取らせん。火埋みて手足煖めよ」とて、かのきらきらしき物を與へて、かへり見もせず立ちさりぬ。童が主なる人、いとあやし。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童に得させけん」とて、まづ急ぎてきこえ奉る。君うちゑみ給ひ、「かの法師、あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹だたしくや思ひけん、わが門の

前に捨てゆきつるよ。法師とて男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど家を出で、なほ才に誇りて、野山にまじり歌詠みてのみあるは、世捨人の捨てらるべきあさましさぞかし。一度けがれし物、その童に取らせよ」とて、とりおろさせ給ひぬ。

西行、後にこのことを人に語りていふ、「右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、神の冥福といふものを生まれながら得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔のこの後やう〳〵衰へさせ給はん世の姿なるは」とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずともうちひそみぬべし。（籐簍冊子）

漢高　漢の高祖
劉邦
曹孟徳　魏の曹操

三　百蟲譜

横井也有

横井也有
また野有
名古屋の俳人
天明三年歿
年八十二

荘周が夢
荘子逍遙遊

古今
古今和歌集

翁
松尾芭蕉

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものゝ限なるべし。それも啼く音のあいなければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ荘周が夢もこのものには託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠くきこゆるはよし。古池にとんで翁の目さましければ、このもののこと、更にも誇りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば、初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものゝ上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

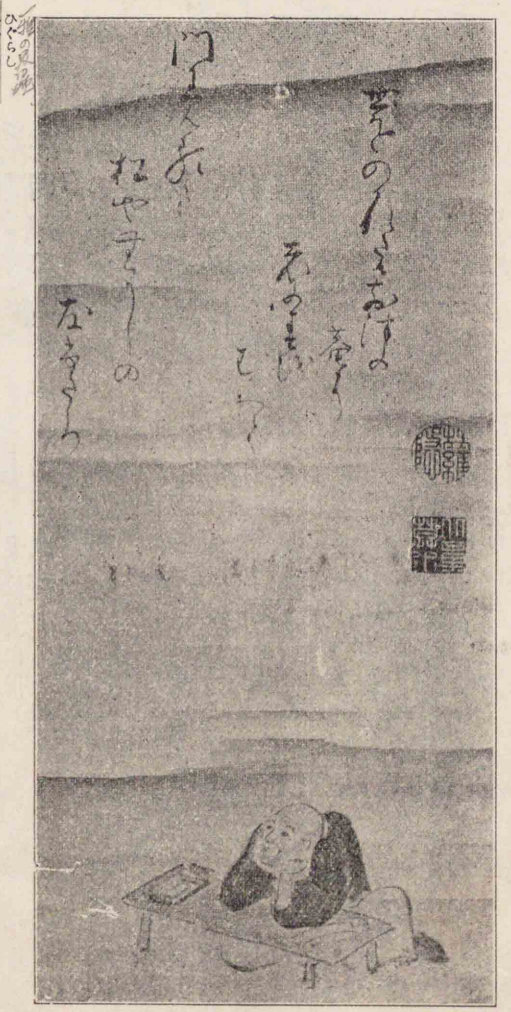
螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水にとびかひ、草にすだく。五月の闇は、只このものの爲にやとまでぞ覺ゆる。

貧の學者
晋の車胤の故事

也有筆蹟

然るに、貧の學者に捕へられて、油火のかはりにせられたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。俳諧にはその眞似すべからず。

歌に螢火と詠ませざるは、殊の外の不自由なり。



茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならん。つくつくぼふしといふ蟬は、つくしこひしと

槐安の都
出典異聞集

賴光
源滿仲の子

もいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり」と、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せんとす。ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代朝敵のはじめとして、賴光をさへ脅したる、いとおそろし。

羽などかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふる折もあらんか。彼は、かひがひしく巣つくりてこそあれ、東海道に散りぼひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらん。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦がすや。蜉蝣ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の謗となれり。おなじ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黃金蟲は賤し。

蟻は明暮に忙しく、世の營に隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都に逃れて、その身の安き事を

東海道の駕籠（歌川廣重筆）

得ん。さるも便あしき方に穴をあけて、丈の堤を崩すべからず。

狗の齒に嚙まるゝ蚤はたまたまにして猿の手に探らるゝ虱は逃るゝこと難かるべし。

蝸牛はたゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家持ちたれども、行く先々を負ひ歩くは雲水の安きにも似ず。

蟷螂の痩せたるも斧をもちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

蟹のあゆみに譬ふべきものこそなけれ。たゞ、原・吉原を駕籠に

のりて、富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲は、その音の似たるを以て名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名の附きたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし、人に疎まる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

藻に住む蟲はわれからと、たゞ身の上を歎くらんを、蓑蟲の「ちゝよ」と呼ぶは、いとやさしげなり。されど父のみ戀ひてなどかは母を慕はざるらん。

蚊は憎むべきかぎりながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、はじめてほのかに聞きたらん、又は長月のころ、力なく殘りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊遣焚く里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七

竹林の七賢
晋の嵇康とその交友
佐國　江氏

賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。

昔、花に愛着せし佐國は、蝶となりて園に遊ぶ。そも俳諧に心とめし後の身、いかなる蟲にかなるらん。花にくるひ月にうかれて、更けゆく行燈の影を慕ひ、なら茶の匂に音を啼くらんこそあはれなるべけれ。（鶉衣）

無し　四　明月

明月や表は人住まぬ茶屋
白雨や茶をつもりもりすゝめ
高き一つ埋みのこして若葉かな
蓮の花や月はひがしにひがしに

蕪村

究庵

（雪觀大山橫）

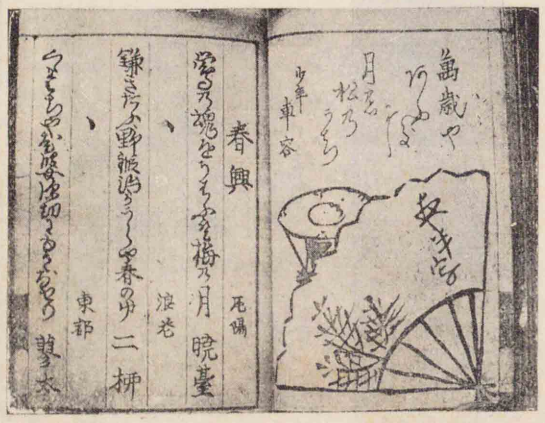
曉臺　加藤氏　居所京都（寛政四年歿）

闌更　高桑氏　居所京都（寛政十年歿）

移竹　田川氏　京都の人（寛暦十年歿）

太祇　炭氏　居所京都（明和八年歿）

几董　高井氏　京都の人（寛政元年歿）



ありつき申　蛙の乳ゆる雲の海　蕪村

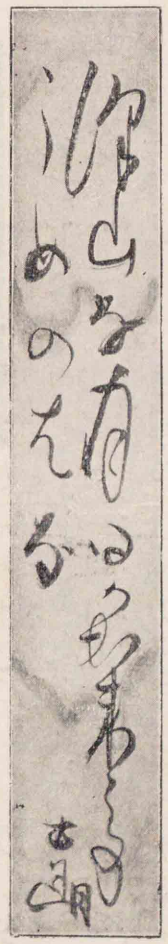
馬借りて　かはるがはるに霞みけり　闌更

枯草の　月に折れてふかしけり　移竹

天橋立　雲の夢にぬぎ捨つる川の座　太祇

山路きて　家は皆風の数　几董

山寺や影の玉から苔清水



士朗

月高くひとり寝もせし淋しさ

大江丸

元日や神々集り二万歳

成美

東西南北のうすず物となりにけり

巣兆

士朗　井上氏　名古屋の人（文化九年歿）

大江丸　安井氏　大阪の人（文化二年歿）

成美　夏目氏　江戸の人（文化十三年歿）

巣兆　疎部氏　畫家にして俳人（文化十年歿）

菜の色に淡あれ水仙富士の山

のどかさや海苔の煙ひとの月

名月やもらはあちらこちらあるき

一茶

大臣殿　平宗盛

五　壽永の秋

平家は福原の舊里につきて、大臣殿然るべき侍、老少數百人召して宣ひけるは、「積善の餘慶家に盡き、積惡の餘殃身に及ぶが故に、神明にもはなたれ奉り、君にも捨てられまゐらせて、帝都を出でて旅泊にたゞよふ上は、何の頼かあるべきなれども、一樹の陰に宿るも先世の契あさからず、同じ流をむすぶも他生の縁なほ深し。況や、汝等は一旦隨ひつく門客にあらず、累祖相傳の家人なり。或は近親のよしみ他に異なるもあり、或は重代芳恩これ深きもあり。家

門繁昌の古は、その恩波によりて私を顧みき。何ぞ今その芳恩に酬いざらんや。然れば十善帝王にも、三種の神器を帶して渡らせ給へば、いかならん野のすゑ山の奥までも、行幸の御供申して、いかにもならんとは思はずや」と宣へば、老少皆涙をおさへて、「あやしの鳥獸も恩を報じ、德に酬ふ心は候ふなり。況や、人倫の身として、いかでかその理を存知仕らでは候ふべき。なかんづく弓箭・馬上にたづさはる習、二心あるを以て恥とす。その上この二十餘年が間、妻子を育み所從を顧み候事も、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。然れば日本の外、新羅・百濟・高麗・契丹・雲のはてまでも、行幸の御供仕り、いかにもなり候はん」と、異口同音に申したりければ、人々皆たのもしげにぞ見給ひける。

さる程に、平家は福原の舊里にして、一夜をぞ明かされける。折節秋の月は下の弦なり。深更空夜しづかにして、旅寢の床の草枕、

入道相國
平清盛

（古版平家物語挿繪）

露も涙にあらそひて、たゞものみぞ悲しき。いつ歸るべしともの覺えねば、故入道相國の造りおき給へる福原の所々を見給ふに、いづれも三年が程にあれはて、舊苔道を塞ぎ、秋の草門をとづ。瓦に松生ひ、垣に蔦茂れり。臺傾いて苔むせり。松風のみや通ふらん。簾絶え閨あらはなり。月影のみぞさし入りける。

明けぬれば福原の内裏に火をかけて、主上をはじめまゐらせて人々皆船にめす。都をいでし程こそなけれども、これも名殘は惜しかりけり。海士の燒く藻の夕煙、尾上の鹿の曉の聲、渚々によする波の音、袖にやどかる月の影、千草に

すだくきりぐす、すべて目にみ耳に觸るることの、一としてあはれを催し、心を傷ましめずといふことなし。昨日は東關の麓に驕をならべて十萬餘騎、今日は西海の涙の上に纜を解いて七千餘人、雲海沈々として、青天既に暮れなんとす。孤島に夕霧へだてて、月海上に浮べり。極浦の涙をわけ、潮にひかれてゆく舟は、半天の雲にさかのぼる。日數經れば、都は山川ほどを隔て、雲居のよそにぞなりにける。遙々きぬと思へども、たゞ盡きせぬものは涙なり。波の上に白き鳥の群居るを見給ひては、あれならん、在原のなにがしの、隅田川にて言問ひけん、名もむつまじき都鳥はと哀なり。

壽永二年七月二十五日に、平家都を落ちはてぬ。（平家物語）

在原のなにがし　在原業平

六　平家の沒落

平家はさすがに名門のこととて、沒落のきはまで大義名分を執

高山樗牛

りて動かざりしは、ゆゝしくもまた哀の極みなりき。木曾は兵衛佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。強ひて院宣請受けけれども、孤軍もとより勝算無し。乃ち使を西國に立て、合體して兵衛佐討つべきよしをいひ送りぬ。平家の答はかくなりき。「よしや世は季になりぬとも、木曾なんどに語らはれて、如何でか都に上るべき。畏くも十善の帝王、三種の神器を帶して、こなたに渡らせ給ふ。須く冑を脱ぎ弦をはづし、きたりて軍門に降るべし。さらば東國征討の御供にも加へらるべきか」と。あゝ何ぞ、其の言辭の堂堂として沒落のやからにたぐはざるや。平家にして若し一時の權變を弄びて勢を廻らさんとだに思はゞ、かゝる時こそ乘ずべき機會なれ。さるを名分の正しきを執りて、成敗の數を顧みず。若し偏に利害の眼よりすれば、迂は則ち迂ならんも、かくして滅びんは、垢を含みて存へんより、如何ばかり美はしかるべき。

木曾義仲　兵衛佐頼朝

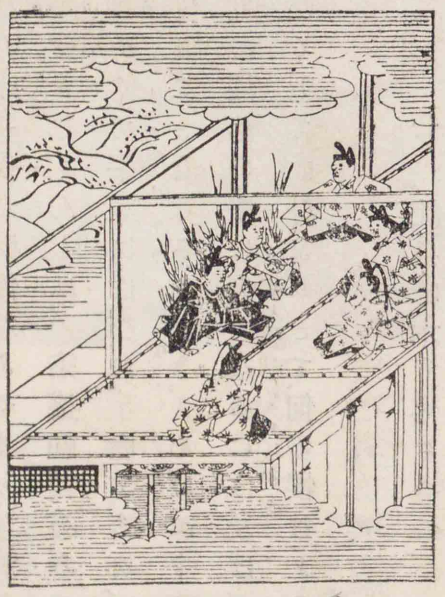
平大納言時忠

本三位の中將平重衡

その太宰府に落行くや、緒方三郎使して申しけるは、「まことに重代の芳恩を思はざるにあらざれども、一院の仰默し難ければ、九國におき奉るべき地も候はず」と。平大納言乃ち烏帽子直垂して出向ひて宣ひけるは、「それ我が君は天孫四十九世の正統、神武天皇より人皇八十一代にあたらせたまふ。祖宗歷代の神靈、我が君をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保元・平治以來度々の逆亂を鎭めて、九州の者共をば皆内さまへこそ召されしか。然るを何ぞやかかる重恩をも打忘れて、あづま夷の下知に從ふこそ奇怪至極なれ」と。嗚呼何ぞ、その態度の堂々たるや。

本三位の中將一の谷に捕はれけるを、院宣屋島に下りて、「三種の神器都に上せよ。重衡を放ち還さん」とぞ傳へける。平家の請文こそ、まことに壯大ならびなかりしか。曰く、「院宣謹みて承り畢んぬ。通盛卿以下、一の谷にて誅せられけるもの其の數少なからず。

請文起草（古版平家物語挿繪）



何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばんや。三種の神器は、正統の天子一日も御身を離し給ふべきに非ず。そもそも、我が君は、故高倉の院の讓を受けさせ給ひてよりこゝに四年、東夷・北狄の禍にあひて暫く西國に御幸あるのみ。天に二日無く、國に二君なし。還幸なからんに於ては、神器などか都に還るべき。そもそも賴朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲によりて申宥められしところなり。然るに忽ちにしてこの鴻恩を忘れて、妄りに干戈を弄ぶ、やがて神罰其の身にかへるべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思召し忘れずば、逆賊の裔に與

し給はずして、早く西國の御幸あるべきか。一門の武運こゝに盡きなば、鬼界・高麗・天竺・震旦のはてまでもまかりなん。悲しい哉、人皇八十一代が間、傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の寶とならんとは。宗盛頓首謹みて申す」と。

かくて平家は亡びぬ。亡ぶるまでも、成敗の爲に其の名節を枉ぐることをなさゞりき。あはれ平家の世盛は誠に大いなりしが、其の沒落の更に大いなるには及ばざりき。うるはしきかな平家、かくして亡びたりとて、何の恨むところぞ。（樗牛全集）

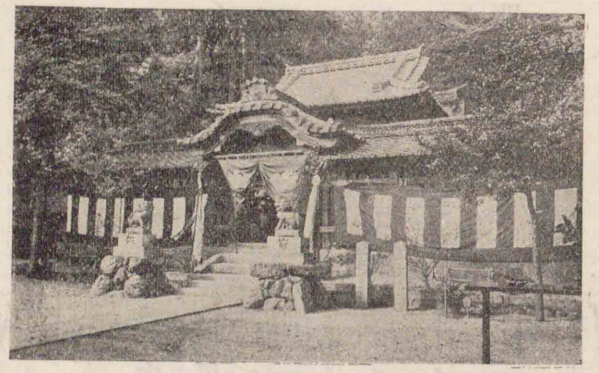
七　流泉・啄木

延喜第六十代醍醐天皇

今はむかし、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿の克明親王と申す人の子なり。萬のことやんごとなかりけり。中にも管絃の道になんいみじかりける。琵琶をもめでたくひきけり。笛をもえならず吹きけり。この人、村上の御時に四位の殿上人にてありけり。

村上第六十二代の天皇

その時に逢坂の關に、一人の盲、庵をつくりて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雜色にてなんありける。その宮は、宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃、琵琶を彈き給ひけるを常に聽きて、蟬丸、琵琶をなん微妙に彈く。



蟬丸神社

しかる間、この博雅、この道をあながちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、かの琵琶を極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人を以て内々に蟬丸に

いはせけるやう、「など思ひかけぬ所には住むぞ。京に來ても住めかし」と。盲これを聞きて、その答へばせずして曰く、

世の中はとてもかくてもすごしてん
宮も藁屋もはてしなければ

と。使かへりてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくく覺えて、心に思ふやう、我あながちにこの道を好むにより て、必ずこの盲に逢はんと思ふ心深し。盲、いのちあらんこともはかりがたし。また我も命を知らず。琵琶に流泉・啄木といふ曲あり。こは世に絶えぬべきことなり。この盲のみこそこを知りたるなれ。かまへて、これが彈くを聞かんとおもひて、夜かの逢坂の關に行きけり。

されども蟬丸、その曲を彈くことなかりければ、その後三年の間、夜々逢坂の盲が庵のあたりに行きて、その曲を今や彈く今や彈く

蟬丸と博雅（扶桑隠逸傳）

と、ひそかに立聞きけれども更に彈かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月すこしうばゝりて、風少し打吹きたりけるに、博雅、あはれ今宵は興あり。逢坂の盲、今夜こそ流泉・啄木はひくらめと思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲、琵琶をかきならして、物あはれに思へるけしきなり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞くほどに、盲、ひとり心をやりて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきに
しひてぞわたる世をすごすとて

とて琵琶をならすに、博雅これを聞きて涙を流してあはれと思ふ

ことかぎりなし。盲、ひとり言に曰く、「おはれ興ある夜かな。もし我にあらぬすき者や世にあらん。今夜、心えたらん人のこよかし、物語りせん」といふを博雅聞きて、聲を出だして、「都にある博雅といふ者こそこれにきたれ」といひければ、盲の曰く、「かく申すは誰にかおはす」と。博雅の曰く、「我はしかく〳〵の人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に逢ふ」と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に、博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語りなどして、博雅、琵琶を具せて、博雅「流泉・啄木の手をきかん」といふ。盲「故宮はかくなん彈き給ひし」とて、くだんの手を博雅に傳へしめてけり。博雅、琵琶を具せ

蟬丸
（案本一洋筆）

ざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、かへすがへす喜びて曉にかへりにけり。

これを思ふにもろ〳〵の道はたゞかくの如く好むべきなり。それに近代は實にしからず。されば、末代には、諸道に達者は少なきなり。げに、これ、あはれなる事なりかし。蟬丸は賤しき者なりといへども、年頃宮の彈き給ひける琵琶を聞きて、かくきはめたる上手にてありけるなり。それが盲になりにければ、逢坂には居たるなりけり。それより後、盲琵琶は世にはじまるなりとなん語り傳へたるとや。（今昔物語）

中澤臨川
名は重雄
工學士
文學者
（大正九年歿
年四十三）

八　樂聖ベートーヴェン

中澤臨川

「かなしみを經てのよろこび」――これが、ルドウィッヒ・フォン・ベートーヴェンの一生の格言であつた。彼の一生は、決して野心家

を滿足させるやうな教訓をも逸話をも有してゐない。それは、苦しんでゐる者のために、眞に苦しむことの出來る力のある者のために、「聖なるかなしみの甘露」を惠むのである。

記憶せよ、――特に若い人々のためにいふ。――この世は薔薇の花の敷かれた街ではない。それは、偉大を希ふものにとつては、常に孤獨と寂寥に追はれなければならない山徑である。最も強いものでさへも、或時は悲哀と失望のために、おのづとその頭を垂れないではゐられない場合がある。

ベートーヴェン

記憶せよ、こんな場合に、眞の偉人が汝を助けに來る。ベートーヴェンが汝に役立つ。

凡庸な利害・得失の世俗戰に倦疲れた時、ベートーヴェンの持つてゐるやうな信念と意志の世界に、暫くでも身を置くことは、どれだけ我々にとつて强味であらう。偉人の身邊には、言葉にいひあらはすことの出來ない勇氣の感染力がある。

我等は運と偶然とによつて、物質界に成功した著名の人達を忘れよう。たゞ心の偉大であつたものだけが、ヒーローの名に値する。人間の偉大さを計る尺度は人格である。我等は成功を說くまい。要は偉大であることであつて、偉大に見えることではない。

偉人の生涯は長い犧牲に外ならない。悲慘な運命が、彼等の肉と靈のくるしみの鐵砧の上で、彼等の精神を鍛へあげた。彼等は、朝に夕に苦痛と試錬とのパンを食べた。

彼等は何のためにそれだけ苦しんだのであらう。それは、後の世の、より强い仲間を助けるために、またそれに力と惠とを與へる

ためであつた。

ベートーヴェンは一七七〇年ボンに生まれた。彼の祖父も父も、その土地の王室附の賤しい音樂師であつた。彼の母は、やはり貧しいコックの娘であつたが、その夫の酒癖のために、一生を一つの樂しみも知らないやうにして送つた。

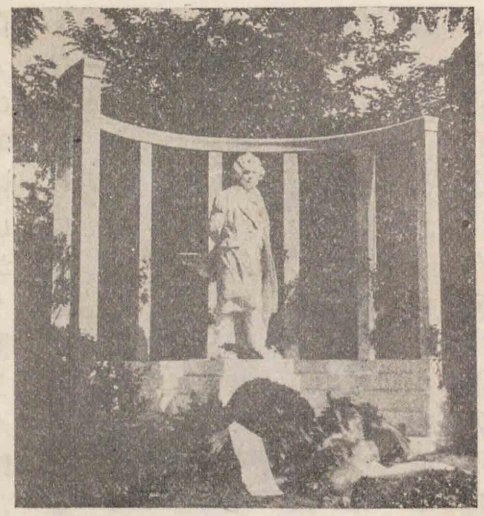
ベートーヴェンは、四歳の時からもう音樂を習はせられた。そして殘酷な父のために、死ぬほどひどい苦行をさせられた。十一歳から、或劇場のオーケストラに出て、一家の生計を助けねばならなかつた。

ベートーヴェン誕生の家の内部

彼は、十八歳の時、眞實たよりにしてゐたその母を失つた。彼は、その以前から、一家の主人役として、二人の弟を育てねばならなか

つた。彼の父は、酒のために全く仕方のないものになりおほせてゐたので、その受ける養老金さへ、直接子供の手に渡されるといふやうな始末であつた。かやうな苦しい經驗は、一生消しがたい深い印象を、このわかい音樂家の胸に與へた。

一七九二年、彼はウインナへ去つた。傷ましい生活の中にも、さすがに若く美くしい夢をはぐくんだ靜かなライン河の岸邊を見棄てることが、どんなに惜しまれたことであらう。「我が故郷！ ところ、今も昔のやうに美しいところ」といつて、彼は一生その故郷



維也のベートーヴェン記念像

を慕つた。

その頃から彼の天才が漸く芽を吹きかけた。一七九六年、彼は自分の手帳にかう書きつけた。「勇氣！　私の身體の虚弱にもかかはらず、私の天才は前途に輝くであらう。……二十五歳！　その年齢に今私は達した。……この年齢は、人間がその全部を發揮せねばならぬ時だ」と。彼はまたかういつた。「私の藝術は、貧しいものを救ふより外の目的に捧げられてはならぬ」と。

ちやうどその頃から、また最大の不幸が、彼の身體に一生の宿を取つた。彼は聾になり初めた。世に、音樂家がその耳を失ふことほど悲しむべきことがあらうか。彼は堪へることの出來ないほどの苦痛を忍んで、幾年かの間それを人に隱してゐた。しかし、いよいよ恢復の見込の立たなくなつた時、劇しい絶望を以てこれを友達に打明けねばならなかつた。「親愛なる友よ、お前のベートーヴェンほど不幸なものはない。私の一番貴い部分である聽感が、今私を見捨てつゝある。……すべて私の愛するもの、私に親愛なあらゆるものを捨ててまで、このみじめな邪慳な世の中に生きながらへねばならぬ私の一生は、どんなに悲慘であらう。……私はしばしばこの身を呪つた。……私はプルタークから忍從の德を敎はつた。出來ることなら、私の運命が私に與へたところに堪へ忍ばうと思ふ。しかし、この廣い天が下にも、私ほど不幸な生き物がある。……忍從よ、悲しい隱れ場所よ、たつた一つの私の隱れ場所よ。」

プルターク
英雄傳の著者
ギリシヤの人
（西紀五〇―一二〇）

プルターク

一八〇六年、彼はテレゼ、ブフォン、ブランスウィック女史と婚約し

た。しかるに、この平和もまた永くは續かなかつた。彼等は互に相愛しながらも、自然に遠ざかつてしまつた。

それからは、ずつと孤獨の生活が續いた。しかも、それは洗ふやうな赤貧と不遇との生涯であつた。彼は靴がなくて外へ出られなかつたりした。「私は殆ど乞食のやうだ」と、彼はいつてる。或有名な曲の出た時などには、僅か七册しか賣れなかつた。

愛も野心も去つた後、彼に殘されたものはたゞ力だけであつた。その力のよろこびと、これを表現する必要とが彼を占領した。一八一二年、彼を見た一人は、「どんな皇帝でも、曾て彼のやうに自分の力を意識しはしなかつた」といつた。

當時、或者は彼の曲をさして、「醉漢の音樂だ」といつた。たしかに醉漢の音樂だ。併し、彼は自らかういつた。「俺は、人類のために喜の神酒の口を開けてやるバッカスだ。俺は、精神の聖狂を人間に

バッカス ギリシヤ神話中の酒の神

與へる醉漢だ」と。

彼はナポレオンを見てからかういつた。「俺が音樂の術を知つてゐるやうに戰術を知つてゐれば、彼に教へてやるものを」と。彼の容貌はナポレオンによく似てゐた。殊に、その意志を現す引締まつた口元が。

この「未來の人道」を目的としてその一生を捧げた偉大な靈は、一八二七年、五十七歳を一期として靜かな往生を遂げた。彼は息を引取る前に、自分の一生を顧みてかういつた。「喜劇の終」と。その日は殊に嵐が劇しかつた。二月の寒い空には雪ふゞきがして。

「悲を經ての喜！」彼ほど聖い喜に憧れた者はなかつた。彼は悲慘な生活のどん底から、未來の人類の爲に「喜悅の福音」を歌はうと思つた。彼は幾度かためらひ、幾度か失敗した後で、とうゝ晩年にその希望を實現した。「第九交響樂」といふのがそれである。

リヤ王　シエークスピヤ作の戯曲

その曲の中途に於て、オーケストラが急に停つたかと思ふと、深い神祕な沈默がやゝ暫く續く。そして「喜悅」の神が優しい靜かな歩を以て、人の心のかなしみを見舞ふ。次第々々にそれが我等の全身を占領し、やがて狂熱の形に變る。そして、嵐の中のリヤ王のやうな狂暴に移つた後で、それがまた靜かな宗教的法悅の境に入り、最後は聖愛の無我郷で曲が結ばれる。

何がかやうな勝利と並ぶことが出來るか。史上に特筆される戰勝も、この永世の凱歌の前にはかない一場の夢ではないか。

偉大な生の熱愛者！　彼の口からは常に喜悅の聲が洩れた。不幸が彼の命を奪はうとしたその日でさへ「おゝ、かうも美しい人生よ」と。また「私は千たび繰返して、私の生を住みたいと思ふ」と。

苦しむ者よ、苦しむ力のあるものよ。汝のためには、この偉人の一生ほど好い慰安と刺戟とはない。彼は、自分が悲慘の頂點にゐる時でさへ、彼の實例が、後世の苦しむ者のために助になることを望んだ。そして、かういつた。「憐むべき忍苦者は、己と同じやうな一人の人間――あらゆる自然の障害にもかゝはらず、男らしい男になるために、その全力をつくした一人の人間――をこゝに見出して、慰安を感ずるであらう」と。（嵐の前）

千利久　千家流茶道の祖

九　男性美

笹川臨風

何をか男性美といふ。

氣象の天空海闊なるにあり、勇快果斷なるにあり。秀吉曰く「我に謀反するものはよもあるまじ。我ほどの主はあるまじきものを」と。秀吉は男性美を發揮したる一人なり。彼の度量は大きく、胸は廣かりき。能く清濁併せ呑むの概ありき。小牧山の役、秀吉、千利休の茶會にあり。戰おこると聞くや、勇快果斷、そのまゝ立上

り、尻をまくりて「えいや〳〵」とて出陣せり。賤が岳の戰には、疾風迅雷の如く進軍し須臾にして金瓢の馬表、岳麓に現れ、佐久間玄蕃をして進退度を失はしめたり。

佐久間玄蕃名は盛政柴田勝家の臣

男性は義俠心あるべきなり。然諾を重んじ、他人の急に走り利害の打算以外に面白き氣象あらざるべからず。往時、我が國に男伊達といふものありき。多くは市井の徒にして、中には無賴漢もなきにあらず。その道德も偏頗にして、識見も高からざりしが、その勇氣ありて水火をも辭せざる底の心意氣に至りては、誠に欽すべきものありき。威武に屈せず權貴を恐れず、自家の利益を犧牲にして他を濟ふの氣魄に至つては、また江戸時代の名物たるに恥ぢずと謂ふべし。

男性は能く責任を知る。事を曖昧模糊に附するは男子の爲すべき所にあらず。人の臣としては人の將たる責任を知り、人の將たるとしては人の將たる責任を知る。學生としては學生の責任を知り、子としては子の責任を知る。すべての人がみなこの責任を知らば、國運は隆々として旺なるべく、社會の文化は駸々として進むべし。

男性の美なるは、常に後暗からざるにあり。後暗きものは、とかくに隱れんとし、左顧右眄して、敢て進まざるなり。男子は光明正大皎々として日月の如くなるべし。自ら潔きものは進むに勇あり、事を爲すに恐るゝ所なし。孟子曰く、「自反而不縮雖褐寬博、吾不惴焉。自反而縮、雖千萬人吾往矣」と。人誰か過なからん。過を悔ゆるが男らしき所にして、男性美の存する所なり。古聖人はいへり、「過則勿憚改」と。また曰く、「君子過如日月食」と。非を遂げ過を隱しおほせんとするは、畢竟自ら難地に踏込んで、常に後暗き思をなすものなり。過あらば直ちにこれを悔い、悔いてこれを改むるを

古聖人孔子

勇ありとなす。過は日月の蝕するが如く浮雲の翳すが如し。これを改むれば、また赫々として光明あり。男性美はその男らしきによりて現る。英雄といひ、偉人といひ、君子といふ、皆男性美を發揮したるによりて、他の渇仰を受くるなり。

古の氣概あるもの、識見あるものは、自ら稱して大丈夫といへり。大丈夫とは、「ますらを」なり、男子なり、眞男子なり、最も能く男性美を發揮するものなり。自ら大丈夫と信ずれば時に遇ふと遇はざると、運と不運とみな問ふ所にあらず。自家が信ずる道に進み、その所信を貫徹するにおいて、最も勇あり斷あるなり。余は今の青年が常に自ら大丈夫を以て任じ、その男性美を發揮せんことを切望せずんばあらず。

彼の蒼たるものは天、我等が住める大地すら、既に滄海の一粟に過ぎず。況や、我が生の須臾なるにおいてをや。然れども、その須

臾なるとは問ふを要せず。男性美は、宇宙に於ける一奇觀たるべきなり。感化は永遠なり。男子の事業は悠久にわたりて渝らざるなり。我等は男と生まれたるを誇とす。男にして男らしからずんば、寧ろ男たらざるに若かず。既に男として生まれたる以上は、男性美を發揮せずんば、男としての生まれがひなきなり。

男子としては眞男子たるべし、大丈夫たるべし。人の褌を以て相撲を取る勿れ。我が力をたのみとし、我が生の眞面目を發揮し、我が事業をして久遠の事業たらしめよ。一時は花の如し。永遠は果實なり、種子なり。（男性美）

一〇　桐一葉

主膳正と三右衛門を先へやりたる且元は、何か心に一思案、寂然と

坪内逍遙

文學博士 早稲田大學名譽教授

主膳正 且元の弟 名は貞隆

三右衛門 今村氏 且元の臣

且元 片桐市正

加藤肥州 肥後守加藤清正

大政所 豐臣秀吉室 淺野氏

して駒立つる、長柄堤のありあけがた、時に囀る小鳥の聲、川霧やうやう晴れゆけば、遠樹模糊として幹をわかち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋のぼる朝煙、くだかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の、空には似ぬや入りかたの、月すさまじき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄飄、見る目も昏し遠方に、おぼろ〳〵とあらはるゝ、名におほ阪の四衢八街、悄然としてさびしげに、一棟高く聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。……南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城。故殿下かくれさせたまひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心ははなればなれ、取りわけ加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所の御方さへ、當家を餘所に見そなはし、浮世はなれし御ありさま。唇齒已にほろぶ。今にもあれ事おこらば、金城湯池も其の甲斐なく……。」

千姫君 德川秀忠の長女

いひかけて聲くもらせ、

市「須彌より重き御遺命、ゆめいさゝかも忘れざれど、御運の末か情なや、此の且元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか。お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が因となり、降つて沸いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること、御運の末といひながら……」

俄に馬よりとび下り、かなたに向ひ平伏なし、

市「これ併しながら不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠にかゝり、おほせつけられし御遺命に、背き奉るけふの仕合せ、不忠とも、いふ甲斐なしともおぼしめさ

ん。それを思へば且元が、此の腸はちぎるゝばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御わび仕らん。おゆるしなされて下さりませ。」

在すが如く兩手をつき、人目なければやゝしばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

長門守木村重成大坂夏陣に戰死（年二十）

市「あゝ我ながら不覺の至。我が大罪の御わびよりも、さしかゝるお家の安危。長門守には如何にせし。心もとなきことどもぢやなあ。」

すかしながむる折こそあれ、はるかにきこゆる蹄の音。程もあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る木村長門守重成、

木「市正どのに候ふな。」

市「長門どの、待ちかねしぞ。」

長柄堤（舞臺面）

御母公淀君

いふ間にかけ寄るくつわづら、右手におりたち顏見あはせ、言葉はなくてそゞろにも、まづ袖ぬるゝ朝霧や、風飄々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて、老いゆく秋のさびしさを、長柄堤にとゞむらん。

木「もはや豐臣の御社稷も、いよ〳〵末となつたるか、棟梁と賴む足下まで、佞人・讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。それがし圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の其の間に、思ひがけぬ珍變あり、つゞいて足下に御討手と、昨朝承り大いに驚き、すぐに

織田入道
織田信雄
大野治長
渡邊尚

お表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日ごろに似氣なく、激論のする席を蹴たて、只今退座ありしとばかり、後は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に被る大野・渡邊等が我意暴慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つてすて、腹搔つ切らんと二度まで、刀の柄に手はかけしが、貴殿が日ごろの教訓を思ひいだして無念を忍び、無實と知つて忠臣を、救ひ得ざりしいふ甲斐なさ。」

くやむを且元おしなだめ、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢申しし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命をおとすは、大忠臣の所爲にあらじ。それがしとても此度の一條、遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰返すは愚癡の至。大切なるはお家の後事。それがし退去の事關東にきこえなば、破綻生ぜんこと治定なるに、きのふまでは去就を定めざりし織田殿の、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。此の上は只ひとへに、籠城の計畫こそ肝要なれ。」

木「して籠城の計畫には、何を以て先とすべきか。」

市「されば、今御城に兵糧・金銀は乏しからず、まつた猛將・勇卒にもことかゝねど、得がたきは智謀の將なり。それがしこれを慮り、萬一の備をなし置きたり。」

木「して其の智謀の將とは。」

市「今九度山に隱れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守が二男、左衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智謀兼備の良軍師。關ヶ原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺ひ居るを、先年お身方となし置いたり。事おこらば上使を以て急ぎ彼を招かる

べし。合戰の進退は、一切彼の人に任せられよ。其の他、關ケ原の一亂以來、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衛基次、いづれも得易からぬ良將なるが、かねてちなみは附け置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配なり。」

木「してまた籠城となつたる曉、敵を防がん手配は。」

市「その儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より、材木あまた伐りいださせ、商業のためといつはり、紀州川の川上より浪花津に押流させ、御船入に積置いたり。まつた港口の御庫には、年ごろ力めて購ひ置きたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るとも、なほ支ふるに餘あるべし。」

木「それに加へて、故殿下が貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費かさむと雖も、なほ若干の餘財あり。」

速水名は守久
御宿名は正倫
和久名は宗是

市「甲冑・兵具も乏しからず。」

木「城は名に負ふ南山不落。」

市「眞田・後藤の智勇をもて、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、ひとへに君家を守護するときんば、」

木「たとへ關東の老奸雄、利をくらはせ、諸大名をなつけ、六十餘州の兵をつくし、四方八面より攻め寄すとも、」

市「中々三年四年が程には、攻めおとさんこと難かるべし。」

木「まつた若年には候へども、いよ〳〵軍はじまりなば、我また一方をうけたまはり、速水・御宿・和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹き飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手をつくさば、金石もまた徹りぬべし。利欲に集まる關東勢、何退くるに難かるべき。此の上は仰にしたがひ、此の事君に言上なし、たゞちに軍の手配せん。

みこゝろ安かれ市正どの。」

市「ほゝ頼もしゝ〳〵。只大切なは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。……とはいひながら往時に照らし、成りゆくするをかんがみれば、」

木「淀の御方の御氣質、社鼠にひとしき大野渡邊。」

市「上、御發明にわたらせらるれど、」

木「讒佞これを蔽ふが故、」

市「地の利はあれども人の和なく、」

木「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏せし、六十餘州の民草も、」

市「天の時にや大御所の、おのづからなる德風に、いつしか靡く世のありさま。」

木「如何なればかくまでに御運かたぶく西天の、」

市「ありあけの影うすれつゝ、」

木「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは、」

市「新日、東天に昇るといふ、」

木「世の成行の、」

二人「影なるか。」

是非もなき世の有樣と、入るかたの月詠め入り、しばしは愚癡にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのぼのと明けにけり。市正おもてを正し、

市「萬一にも其の期に至り、百計合期せずばそれまでなり、當來を誰かは知らん。殘れて後止まんのみ。大丈夫、豈徒に杞憂せんや。後事を足下に託せし上は、もはや思ひ殘す事もなし。」

木「してそこもとにはこれよりして、」

市「居城茨木へ一まづ立越え、」

木「といはるゝはうけ取りがたし。若しやこれが今生の、」

市「あゝいや、いさぎよき最期をだに、遂ぐべき機會を失ひし、市正が武運の拙さ。御詫の名こそ立ため、償ひがたき身の大罪。此の身ひとつをとやかくと、千筋に迷ふ心のうち。いやなに心ばかりは此の後とても、君の御影につきそひまゐらせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなん其の時には」

木「それがしとても事破れて、御運の末となるときは、此の世の思出、奉公をさめ、關東勢が眞中に、縱横無盡の血戰なし、花々しく討死なさん。」

市「おゝ勇ましゝ、いさぎよし。それがし存へ世にあらば、其の目ざましき働をば、餘所ながら見物なさん。なほ再會は黃泉にて、まづそれまでは長門どの。」

木「さやうござらば市正どの。」

市「隨分堅固で、」

木「そこもとにも。」

惜しきが中の生別離、右と左にたちわかれ、駒ひき寄せて式退や、秋さび月毛乘る人の、心も知らで勇みたつ、手綱ひかへて、

兩人「さらば〳〵」

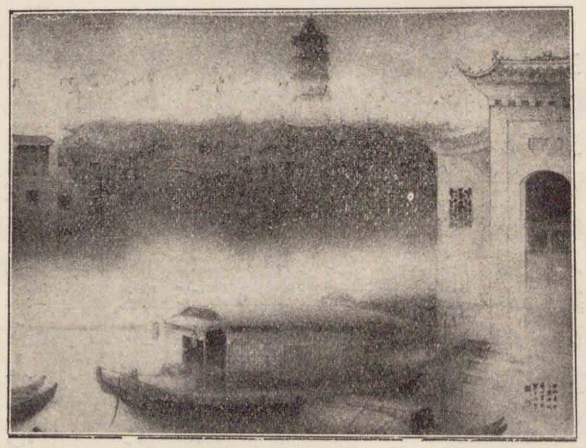
と西東、見送るかたに霧や立つ、眼や曇るおぼろ〳〵。いなゝく駒の聲はして、たちわかれゆく兩人が、此の世に殘す面影は、また見ぬ影とぞなりにける。（桐一葉）

一一 霧

豐島與志雄

十一月のある晩であつた。妙に暖かくて、霧が深く罩めてゐた。私は友と二人で、あてもなく街路を歩いた。

立ち並んだ人家の上やとほりの中を、濃霧は徐々におし流れてゐた。そして物蔭には、それがゆるやかに渦を卷いた。人は、自分



霧（飛田周山筆）

のまはり十歩の所と、それから垂れ籠めた濃霧の帷との外には、何にも見なかつた。何か不思議な物の静かに流れてゆくのが、はつきりと心に聽かれた。凡ての物が濕つてゐる。そして柔かく息を潜めてゐる。人は、自分の先に何があるか、また自分の後に何があるか、自分の踏む地面が堅い地盤であるかどうか、それを更に想はかつた。

凡てが朧に浮んでゐる、しつとりした重みで、静かに浮んでゐる。凡てが胸のうちだけで柔かい呼吸をしてゐる。自分自身に還つて、自分の胸のあらはなものが身を沈めて祕められたものが姿を示してゐる。

私達はゆるやかに歩きながら話を續けた。

「こんな晩は」と、友は云つた。「遠い過去のことが、かうしみ〴〵と心に歸つて來るやうだね。それも過去といふ衣を着ないで、現在の姿を帶びて心の中に蘇つてくる。過去を見ようと思つて、うしろをふり返る要はないんだ。そしてまた未來も……過去と現在と未來とが、一樣の力に均されてしまふのだ。いや、むしろみんなが一つに融け合つてしまふのだ。それはもう、過去とか現在とか未來とかいふやうなものぢやない。何かかう一つのはつきりした姿が、それでまた溫和な朧な姿が、つく〴〵と見つめられるやうだね。」

「僕もさういふ氣持を知つてゐる」と、私は云つた。「僕はそれを自分の現在の姿だと思つてゐるよ。僕達が過去とか現在とか未來とか呼ぶものは、また考へたり想像したりしてゐるのは、みなそれ

全體が、自己の現在の姿だらうぢやないか。そして、自分の全體が一つに纏まつて、かうぼんやり見えてくるやうな時には、僕はしきりに生命などといふやうなことを考へさせられるね。あらゆる物の中に、原始生命の息吹とでも云ひたいやうなものが宿つてゐるやうに感じてね……到る處に、何かが靜かに芽ぐんでゐる。何時も芽ぐみつゝ息をしてゐる。そしていつも現在なんだ。遠い昔も未來も、それから今も、みんな過ぎ去るといふ事のない現在なんだ。」

「然し、僕は、時が過ぎ去るといふことをはつきり感じるね。」

「事件は過ぎ去つても、そのなかに宿つた魂は永久に過ぎ去りはしない。」

「さう、それを魂と呼んでいゝなら、魂は過ぎ去りはしない。然しそんなことを考へる時には、たゞ直感に頼る外はないね。僕は理

解といふことに大なる信用を持たないが、また直感の覺束なさもよく感じるね。」

「さうだ、直感といふものは裏切られがちのものだね。けれど、それは直感そのものの罪ぢやなくて、僕達の心が、まだ正當な直感を持つまでに進んでゐないせいなんだらう。」

「君はさういふ時が來ると信じるかね。」

「信じたいね。」

私達は何かしら興奮してゐた。然しそれは、心の底へ底へ沈んでゆかうとする興奮であつた。斷片的な思が、ちら〳〵と心の底に閃めいてまた消えてゆく。そしてそれが、ある大きいしとやかなものに包まれてゐる。

「こんな晩は何處へ行つても自分の家のやうな氣がするね」と、私は云つた。

「そしてまた、何處へ行つてもほんとうの自分を取りおとしてゐるやうな。」

「さうだね。馬鹿にはつきりしたものと妙にぼんやりしたものとが一緒にこんぐらかつてゐる。」

「濃い霧に惑はしがあるんだよ。」

「そしてまた、不純な妄想が眠つてしまふんだよ。」

私達は廣いとほりを歩いたり、狹い横町へ曲つたりした。到る處に、すぐ眼の前に濃霧があつた。そして濕んだ軒燈のまはりには、靜に光の輪が描かれて、耳に聞えない音を立ててゐた。

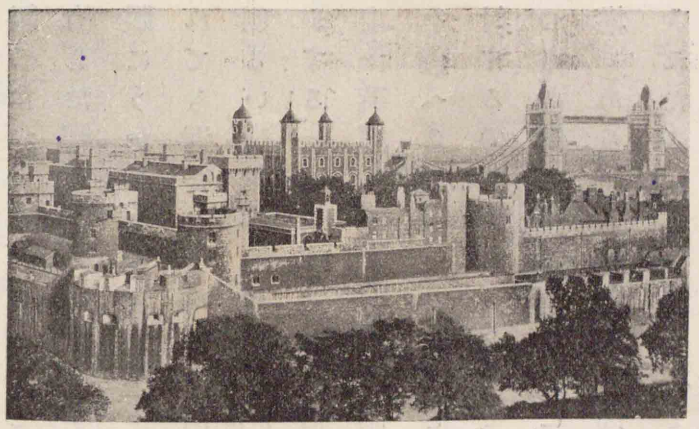
一二　ロンドン塔

夏目漱石

「來るに所なく、去るに去所を知らず」といふと禪語めくが、余はどの路を通つて塔に着したか、又如何なる町を横ぎつて吾が家に

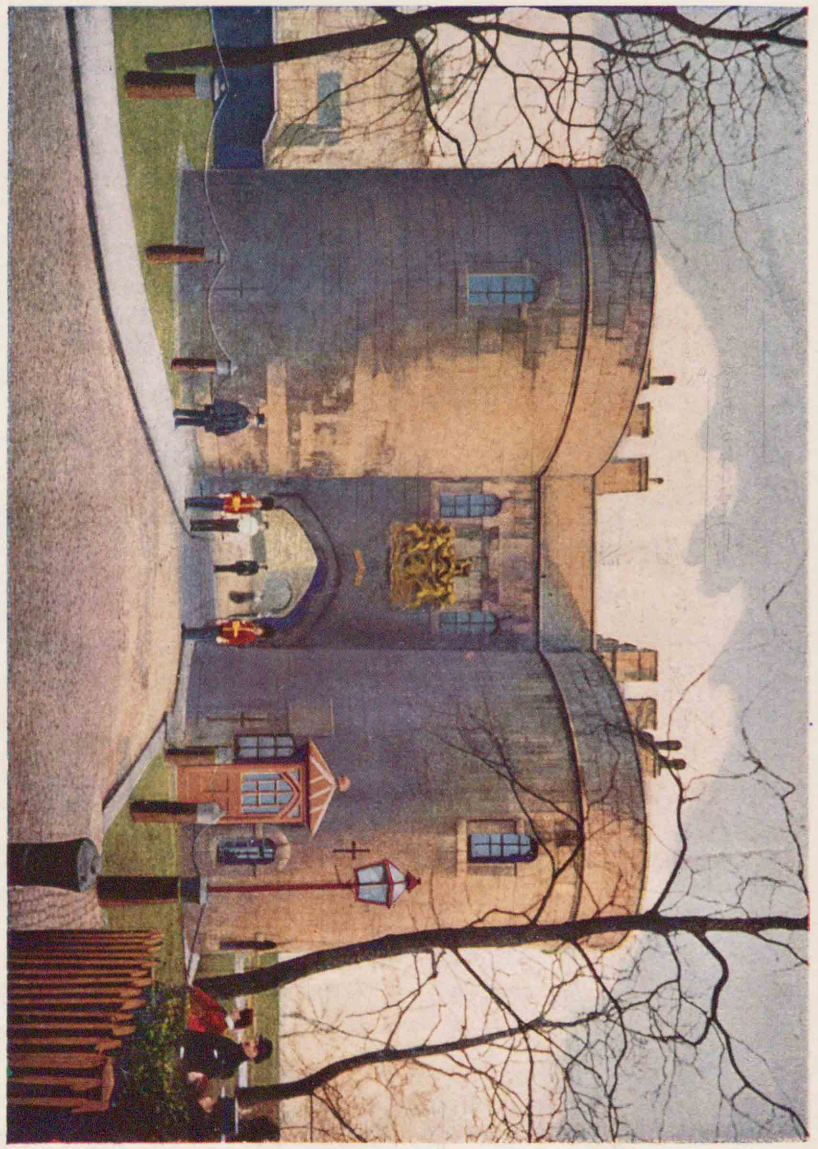
歸つたか、いまだに判然しない、どう考へても思出せぬ。唯塔を見物しただけは慥かである。塔その物の光景は、今でもありゝと眼にうかべる事が出來る。前はと問はれると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。唯前を失し後を失したる中間が會釋もなく明るい。恰も闇を劈く稲妻の、眉に落つると見えて消えたる心地がする。ロンドン塔は宿世の夢の焦點の樣だ。ロンドン塔の歴史は、英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去といふ怪しき物を蔽へる戸帳がおのづと裂けて、龕中の幽光を二十世紀の上に反射するのはロンドン塔である。凡てを葬る時の流が逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひきたれりとも見るべきはロンドン塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して、馬車、汽車の中に取殘されたるはロンドン塔である。

このロンドン塔を、塔橋からテームス河を隔てて眼の前に望ん



だ時、余は今の人か、はた古の人かと思ふまで、我を忘れて餘念もなく眺め入つた。

冬の初とはいひながら、物靜かな日である。空は灰汁桶を掻き交ぜたやうな色をして、低く塔の上に垂懸かつて居る。壁土を溶かし込んだ樣に見えるテームスの流は、波も立てず、音もせず、無理やりに動いて居るかと思はれる。帆掛舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆を操るのだから、不規則な三角形の白い翼が、何時までも同じ所に停つて居る樣である。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。唯一人の船頭が艫に立つて櫓を漕ぐ。

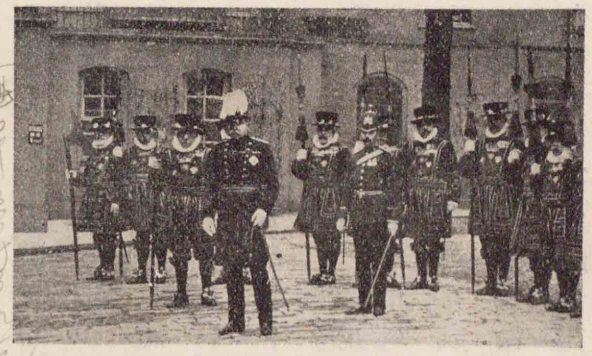


ロンドン塔（門中）

これも殆ど動かない。塔橋の欄干のあたりには白い影がちらちらする。大方鷗であらう。見渡した處すべての物が靜かである、物憂げに見える、眠つて居る、皆過去の感じである。さうして、その中に、冷然と二十世紀を輕蔑する樣に立つて居るのがロンドン塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史のあらんかぎりは、我のみはかくあるべしといはぬばかりに立つて居る。その偉大なるには、今更のやうに驚かれた。

この建築を俗に塔と稱へて居るが、塔といふは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成立つ大きな地域である。ならび聳ゆる櫓には、丸きもの角張りたるものの色々の形狀はあるが、何れも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へるが如くに見える。余はまだ眺めて居る。セピア色の水分を以て飽和したる空氣の中に、ぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀のロンドンが、吾が心

の裏から次第に消え去ると同時に、眼前の塔影が、幻の如き過去の歴史を吾が脳裏に描き出して來る。朝起きて曙る澁茶に立つ湯氣の、寢足らぬ夢の尾を曳く樣に感ぜられる。暫くすると、向岸から長い手を出して余を引張るかと怪しまれて來た。今まで佇立して身動きもしなかつた余は、急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手は尙々强く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡りかけた。長い手はぐい〳〵引く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔門まで馳せつけた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮游する此の小鐵屑を吸收してしまつた。（漱石全集）



ロンドン塔守衛

十二月十九日　平治元年

光頼　藤原顯頼の子（承安四年薨）

信頼　藤原氏光頼の甥

一三　光頼參内

内裏には十二月十九日、公卿會議として催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の擧動過分なりとて、不參にておはしましけるが參内して承らんとて、殊にあざやかに束帶引繕ひ、蒔繪の細太刀おとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に膚に腹卷着せ、雜色の裝束に出で立たせ、自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手にかけて、光頼が首をば急ぎ取れ」とて、御身近く置き、その外清げなる雜色四五人召具して、大軍陣を張りて處々門々を固め守護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵共も大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。紫宸殿の後を經て殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上、藤達皆下にぞ着かれたる。光頼卿、こは不思議の事かな。人はいかに

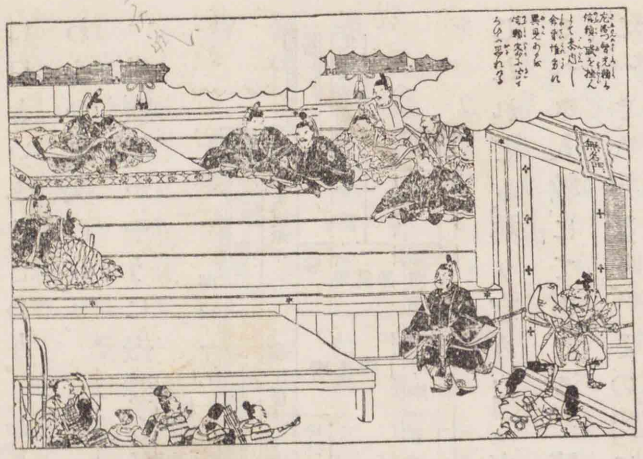
長方　藤原顯長の子

衛府督　右衛門督信頼

振舞ふとも、かれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には着くまじきものをと思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ」と色代して、しづ〳〵と歩み、信頼卿の上にむずと着き給ふ。光頼卿は、信頼卿の爲には母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に畏れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿、あなあさましと見給ふに、光頼卿下襲の尻引直し、衣紋繕ひ、笏とり直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すと見えて候。召に參ぜざらん者をば死罪に行はるべしとやらん承りて參内する所なり。抑、何事の御諚ぞ」と問ひけれども、信頼卿物も宣はず。着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして衆議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて、「悪しう參りて候ひけり」とて、しづ〳〵と歩み出でられけり。

光頼の参内

頼光・頼信　共に源満仲の子



庭上に充ち滿ちたる兵どもの、これを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人、一人もおはしまざりつるに、しいだしたることよ。門を入り給ふより、いさゝかも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戰せば、いかばかりかたのもしからん」と申せば、傍なる者、「むかし頼光・頼信とて、源氏の名將おはしましき。その頼光をうち反して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし」と、その頼信をうち反して、信頼と附き給ふ右

衛門督殿は、あれほどの臆病にはおはしますぞ」といへば、壁に耳、天に口といふことあり。おそろしゝ、聞かじ」といひながら、皆忍びわらひに笑ひけり。

光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小部の前、見參の板、高らかにふみ鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職、然るべき人共なり。その内に入らんこと甚だ面目なるべし。さても、先日、右衛門督が車の尻に乗りて、少納言入道が首實驗の爲に、神

清涼殿内裏圖

少納言入道藤原通憲入道信西

勸修寺内大臣藤原高藤
三條右大臣高藤の子定方

樂岡へむかはれけることは如何に。以ての外然るべからざるふるまひかな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤もいまだ聞及ばず當時も大いに恥辱なり。就中、首實驗は甚だ穩便ならず」とのたまへば、別當「それは天氣にて候ひしかば」とて、赤面せられけり。

光頼卿重ねて「こは、如何に勅諚なればとていかで存ずる旨を一議申さざるべき。われらが曩祖勸修寺内大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代、承り行ふ事は皆これ德政なり。一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴なひて讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝほどのことはなかりしに、御邊始めて暴惡の臣にかたらはれて累家の佳名を失はんこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目

主上　第七十八代二條天皇
上皇　第七十七代後白河天皇

の宿より馳上るなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人等待ちうけて、大勢にてぞあなる。信頼卿がかたらふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには時刻をやめぐらすべき。もしまた火などをかけなば、君もいかでか安穏にわたらせ給ふべき。如何にいはんや君臣となりたらんだにも朝家の御歎なるべし。灰燼の地ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は、御邊に大小事を申し合はすとこそきこゆれ。相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて、主上は何處におはしますぞ。「黒戸の御所に。」「上皇は。」「一本御書所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劍璽は何處に。」「夜のおとゞに」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ別當かくぞ答へられける。また「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ」と宣へば、「それには右衛門督すみ候へば、その方ざまの女房など

許由　支那古代の隱士

ぞかげろひ候ふらん」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、「世の中は今はかくこざんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し參らせたんなり。末代なれども、さすがに日月は未だ地に墜ち給はぬものを、天照大神・正八幡宮は王法を如何に守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、わが朝にはいまだかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな」とてのろ〳〵しげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげに立たれたれども、かつは悲しくて、「われ如何なる宿業によりてかゝる世にうまれ會ひ、憂きことをのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有樣を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ」とて、上の衣の袖絞るばかりに泣かれけり。信頼卿の座上に著かせられし時はさしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて打萎れてぞ出で給ひける。

一四　待賢門の戰

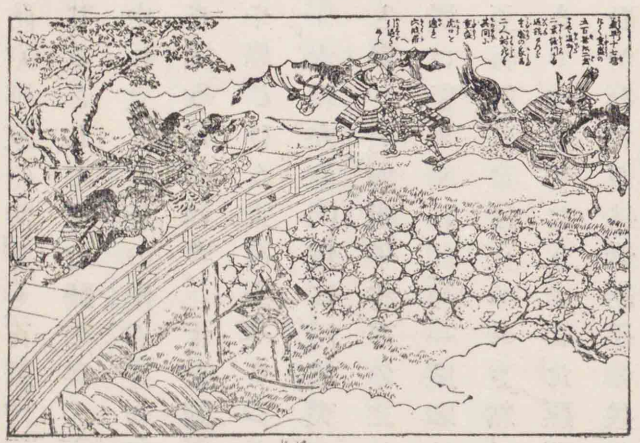
左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に櫨の匂の鎧、蝶の据金物打つたるに龍頭の兜の緒を締めて、小烏といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、滋籐の弓持つて、黃桃花毛なる馬に、柳・櫻摺つたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛宣ひけるは、「年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰か爰に樊噲・張良が勇をなさざらん」とて、三千餘騎を三手にわかつて、近衞・中御門・大炊御門大宮表へ打出でて、陽明・待賢・郁芳門へ押寄せたり。大内には三方の門をさし固め、東表をば開かれたり。承明・建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺・桐壺・紫宸殿

樊噲・張良共に漢の高祖の臣

の前後まで兵ひしと並居たり。皆源氏勢なれば、白旗二十餘流打立つたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流さしあげて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨をどつと作りければ、大内も響き渡つて、夥し。鬨の聲に驚いて、只今までゆゝしく見えられつる信頼卿、顏色變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝ふるひて下りかねたり。人なみ〳〵に馬に乘らんと引寄せさせたれども、太りせめたる大の男の、大鎧はきたり、馬は大きなり、乘煩ふ上、主の心には似も似ず、逸り切つたる逸物なれば、つと出でん、つと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべくおぼえて、とかく乘りかね給ふ所を、侍二人つと寄つて、「疾く召し候へ」と押上げたり。あまりに押したりけん、弓手の方へ乘越して、伏し樣にどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顏に砂ひしとつき、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大將とて恐れ給

ひけるが、はたと睨みて、「あの信頼といふ不覺人は臆したりな」とて、日華門を打出でて郁芳門へむかはれければ、信頼も鼻血押拭ひ、とかくして馬に搔乘せられ、待賢門へむかはれけるが、物の用にあふべしともみえざりけり。

左衞門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に殘しおき、五百餘騎にて押寄せて呼ばはり給ひけるは、「この門の大將軍は信頼卿とみるは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子左衞門佐重盛、生年二十三」と名のりかけければ、信頼返事にも及ばず、「それ防げ侍ども」とて引退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし。我先にと逃げければ、重盛愈〻勇みて、大庭の椋の木の下まで攻附けたり。義朝これを見て、「惡源太はなきか。信頼といふ大臆病人が、待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追出せ」と宣ひければ、「承り候」とて、驅けられたり。



義平大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名のれ、聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子鎌倉惡源太義平と申す者なり。生年十五歲、武藏の大藏の軍の大將として叔父帶刀先生義賢を伐ちしより此の方、度々の合戰に一度も不覺の名をとらず。年つもつて十九歲。見參せん」とて、五百騎の眞中に割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、竪樣横樣十文字に敵をさつと蹴ちらして、端武者どもに目なかけそ、大將軍を組んで擊て。櫨の匂の鎧に蝶の裾金物打つて、黃桃花毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。

筑後守平家貞
平將軍平貞盛

押並べて組んで落ち、手捕にせよ」と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども、百騎ばかりが中にぞ隔たりける。　惡源太をはじめとして十七騎の兵ども、大將軍に目をかけて、大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻右近の橘を七八度まで追廻して、組まん〳〵とぞ揉うだりける。　十七騎に驅けたてられて、五百餘騎かなはじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。

大將左衛門佐は弓杖突いて馬の息をつがせ給ふ所に、筑後守つと參りて、「曩祖平將軍の二たび生まれかはり給へる君かな」と、向ふ樣に譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をば止めおき、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻寄せたり。　また惡源太驅向ひ見まはしていひけるは、「只今むかひたるは皆新手の兵なり。　たゞし大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも、今度においては餘すまじ。　押並べて組んで

とれ、兵共」と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は難波・瀨尾・伊藤武者をはじめとして、百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、惡源太弓をば小脇にかいはさみ、鐙踏張り突立ちあがり、左右の手を擧げ、「幸に義平源氏の嫡々なり、御邊も平家の嫡々なり。　敵には誰か嫌はん。　寄れや組まん」といふ儘に、先の如く大庭の椋の木の下を追廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。　重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮表へ引いて出づ。

惡源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息をつがせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、「汝が不覺に防げばこそ敵度度驅入るらめ。　あれ速に追出せ」といひつかはされければ、俊綱馳せてこの由をいふに、「承り候。　進めや、者ども」とて、色もかはらぬ十七騎、大宮表に驅出でて、敵の中へ面もふらず割つて入る。　引立ちたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引き

ければ、「我が子ながらも義平は、よく驅けたるかな。　あ、驅けたり」とぞ譽められける。

大將重盛・與三左衞門景安・新藤左衞門家泰主從三騎かけ放れ、二條を東へ引かれければ、惡源太、鎌田にきつと目合せて、「爰に落つるは大將とこそ見れ。　かへせや」とて追つかけたり。　既に堀川にて追つつめけるが、弓手の方に材木多くみち〳〵たるに、惡源太の乘り給へる馬かたなづけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の方へけし飛んで、小膝を折つてどうと伏す。　鎌田兵衞のばさじと、十三束とつて交ひ、よつ引いてひようと射る。　重盛の射向の袖に、はたと中りて飛返る。　やがて二の矢を射たりければ、押附にちようと中りて、筐かづき碎けて跳り返れり。　惡源太、「これはきこゆる唐皮といふ鎧ござんなれ。　馬を射て落ちん所を擊て」と下知せられければ、又よつ引いて追ひざまに、筈の隱るゝ程射込みたり。　馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳ねおとされ、兜も落ちて大童になり給ふ。　鎌田、堀川を馳せこえて、重盛に組まんと落合ふ。　重盛、近づけては叶はじとや思はれけん、弓の弭にて鎌田が兜の鉢をちようと突く。　突かれてゆらふる間に、兜を取つて打着つつ、緒を强くこそ締められけれ。

與三左衞門馳せよつて中に隔たり、「景安爰にあり、寄れや、組まん」といふ儘に、鎌田兵衞と引組んで取つて押へける處に、惡源太馬引返し、これも堀川を馳越えて、重盛に組まんと飛んでかゝりけるが、鎌田をや助くる、大將をやうたんと思案しけれども、大將には又も寄せあふべし。　政家をうたせては叶はじと思ひ、與三左衞門に落ちあうて、三刀刺して首をとる。　重盛は賴みきつたる景安擊たせて、命生きて何かせんとて、既に惡源太と組まんとせられけるを、進藤左衞門馳せきたり、「家泰が候はざらん處にてこそ大將の御命を

ば捨て給ふべけれ」とて、我が馬を引向け、中に隔てて悪源太とむずと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主をうたせては叶はじと思ひければ、進藤左衛門に落重なつて首を掻く。この間に、重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、たすかり難き命なり。（平治物語）

竹田出雲
名は清定
大阪の浄瑠璃作者
（寶暦六年歿年六十六）

一五　兵衛佐兒鎧

竹田出雲

頃は平治の年くれて、冬の日數もつもる雪、花咲きし樹も木枯と、かはる浮世のさまの頭、源義朝の三男兵衛佐頼朝は、十三歳の兒鎧、待賢門の夜軍より、父に從ひをちこちの、たつきも知らぬ旅疲、憂き時しもにあふみ路や、野路・篠原のほとりより、うち遅れしもしら月毛、鞭をうつゝの鞍・鎧、手綱に結ぶ夢の通路、ふらり〳〵と眠りゆく。かしこの松の葉をたれて、馬上の襟にひいやりと、つもれる雪を吹きこぼす、風も烈しき心のけなげ、すはや敵と拔討に、切つておとせし一枝に、不香の花のちりちりばつと、御目をさます雪あかり、左馬の頭もましまさず、隨ふ者もあらざれば、心細くもたゞ一騎、何とぞ父にあうばかの、宿はいづくぞ道しるべ、あゝこの駒よ〳〵、「われおちにき」と詠みけるは、それは

伊勢平氏年々鑑原本

われおちにき
名にめでてなれるばかりぞ女郎花
われおちにきと人に語ふな（僧正遍昭）

嵯峨野の秋の空、いまは冬野とあれはてし、不破の關路をよそにし、今のつらさの名にも似ぬ、やすの河原に駒とめて、をりしも向ひを見給へば、うき世を渡る舟長が、つもるとし木の柴小舟、しばしと招き寄せ、「なう〳〵、老人、この程都のさわがしさ、世にも住み

落ちゆく兵衛佐頼朝（保元平治闘闘會）

うくおぼゆれば片田舎のしるべを尋ねくだる者、むかひの地まで其の舟をめぐめよかし」とおほせける。

おきなつくづく見まゐらせ、いかにつつませ給ふとも世の常ならぬ御ありさま、源氏の若君佐殿とは、一目にそれとみなれ棹、いたはしさよとさしよせて、舟をばいかで惜しむべき。とくくめされ候へ」と、柴うちおほひ身を隠す、鎧の袖のつゆけきは、櫂の雫やもり山の、里はこなたと指さして、あれくゝ御覽ぜ、としのいそぎの市人が、荷ひつれたる海つものいりこ・くしあはび・のし昆布、あきなふ里のしめかざり、穂長・ゆづりは・だい！〳〵・柑子、にぎはしや。軒端々々の

松たてわたし年を待つ。

うらやましやな頼朝が、もしも天の宣り利にかなひ、またもや都の春にあひ、二たび武運を開きなば、この恩を報ずべし。げに、頼みある御身のすゑ、しばしは雪に埋木も、ひらくる梅のはつ日影、君をもちひの鏡の宿、おきなが祝ふ言の葉も、のちにぞおもひしら籏の、靡き隨ふ源氏のたね、遂には御代にいで舟や、心にまかす波風も、小平さして漕ぎよする。（伊勢平氏年々鑑）

一六　元　日

夏目漱石

雑煮を食つて書齋にひきとると、しばらくして三四人來た。いづれも若い男である。その内の一人がフロックを着てゐる。着なれないせいか、メルトンに對して妙に遠慮するかたむきがある。あとの者は皆和服で、かつ不斷着のまゝだから、とんと正月らしく

虚子
高濱清
俳人

ない。この連中がフロックを眺めて「やあ――やあ」と一つ宛いつた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで「やあ」といつた。

フロックは白い手巾を出して、用もない顔を拭いた。さうして頻りに「屠蘇」を飲んだ。ほかの連中も大いに膳のものを突ついてゐる。所へ虚子がきた。これは黒い紋付を着て、極めて舊式にきまつてゐる。「あなたは黒紋付を持つてゐますが、やはり能をやるからその必要があるんでせう」と聞いたら、虚子が「えゝさうです」と答へた。さうして「一つ謠ひませんか」といひ出した。自分は「謠つてもよい」と應じた。

それから二人して「東北」といふものを謠つた。餘程以前に習つただけで、殆ど復習といふことをやらないから、所々甚だ曖昧である。その上、我ながら覺束ない聲が出た。漸く謠つてしまふと、聞いて居た若い連中が、申合せたやうに自分をまづいといひ出した。

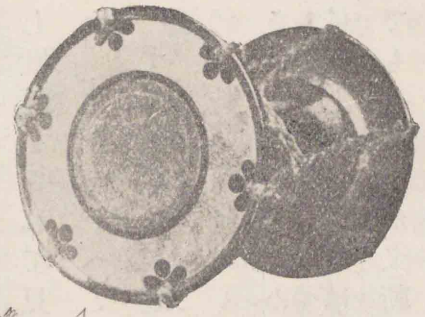
中にもフロックは「あなたの聲はひよろ〳〵してゐる」といつた。この連中は、元來謠のうの字も心得ないものどもである。だから虚子と自分との優劣はとても判らないだらうと思つてゐた。然し批評をされて見ると、素人でも理の當然な所だから已むを得ない。「馬鹿をいへ」といふ勇氣も出なかつた。

すると虚子が、近來鼓を習つてゐるといふ話をはじめた。謠のうの字も知らない連中が「一つ打つて御覽なさい、是非御聞かせなさい」と所望してゐる。虚子は自分に「ぢや、あなた謠つて下さい」と依頼した。これは、囃の何物たるを知らない自分にとつては、迷惑でもあつたが、又斬新といふ興味もあつた。「謠ひませう」と引受けた。虚子は車夫を走らして鼓をとりよせた。鼓がくると、臺所から七輪を持つてこさして、かん〳〵いふ炭火の上で鼓の皮を焙りはじめた。みんな驚いて見てゐる。自分もこの猛烈な焙りかた

鼓

には驚いた。「大丈夫ですか」と尋ねたら、「えゝ、大丈夫です」と答へながら、指の先で張切つた皮の上を「かん」と彈いた。ちよつと好い音がした。「もう宜いでせう」と、七輪からおろして、鼓の緒を締めにかかつた。紋服の男が赤い緒をいぢくつてゐる處が何となく品が好い。今度はみんな感心して見てゐる。

虛子はやがて羽織を脱いだ。さうして鼓を抱へ込んだ。自分は「すこし待つてくれ」と頼んだ。第一彼が何處いらで鼓を打つか見たい。虛子は「こゝで掛聲をいくつかけて、こゝで鼓をどう打つからお遣りなさい」と懇に説明してくれた。自分にはとても呑込めない。けれども、合點のいくまで研究してゐれば、二三時間はかゝ



る。已むを得ず、好い加減に領承した。そこで羽衣の曲を謠ひ出した。「春霞たなびきにけり」と、半行程くるうちに、どうも出が好くなかつたと後悔し始めた。甚だ無勢力である。けれども、途中から急にふるひ出しては、總體の調子が崩れるから、姿態因循の儘少し押して行くと、虛子がやにはに大きな掛聲をかけて、鼓をかんと一つ打つた。

自分は虛子が、かう猛烈に來ようとは夢にも豫期してゐなかつた。元來が優美な悠長なものとばかり考へてゐた掛聲は、まるで眞劍勝負のそれのやうに自分の鼓膜を動かした。自分の謠は、この掛聲で二三度波を打つた。それが漸く靜まりかけた時に、虛子が又腹一杯に横合から威嚇した。自分の聲は威嚇される度によろ〳〵する。さうして小さくなる。しばらくすると、聞いてゐる者がくす〳〵笑ひ出した。自分も内心から馬鹿々々しくなつた。

其の時、フロックが眞先に立つてどつと吹出した。自分も調子につれて、一緒に吹出した。

それから散々批評をうけた。なかにも、フロックのは尤も皮肉であつた。虚子は微笑しながら、仕方なしに自分の鼓に自分の謠をあはせて、目出度く謠ひ納めた。やがて、「まだ廻らなければならない所がある」といつて、車に乘つて歸つて行つた。あとから、又いろいろ若いものにひやかされた。（永日小品）

一七　兼好のことば

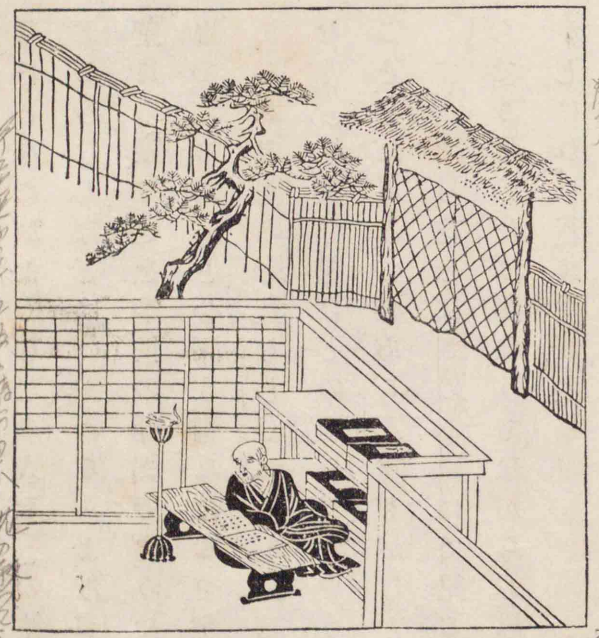
一　雪の朝

雪のおもしろう降りたりしあした、人のがりいふべきことありて、文をやるとて、雪のこと何ともいはざりし返事に「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬ程のひがくしからん人の仰せらるゝこと、聽きいるべきかは。かへすがくちゞ惜しき御心なり」と、いひたりしこそをかしかりしか。いまはなき人なれば、かばかりのことも忘れがたし。（徒然草）

二　花と月

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、垂れこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などにこそ見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにけれ

兼好法師（扶桑隱逸傳）



ば」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくなる人ぞ、この枝かの枝散りにけり。今は見どころなしなどはいふめる。よろづの事も始終こそをかしけれ。望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、暁近くなりて待ち出でたるがいと心深う青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、打ちしぐれたる村雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴・白樫などの霜枯れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都恋しうおぼゆれ。

すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。（徒然草）

三　なきあと

去る者は文選古詩の句

人のなきあとばかりかなしきはなし。中陰のほど、山里などに移ろひて、便あしく狭き所にあまたあひ居て、後のわざども營みあへる、心あわたゞし。日數の早く過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日はいとなさけなう、互にいふこともなく我かしこげに物ひきしたゝめ、ちりぢりに行きあかれぬ。もとの住家に歸りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。「しかじかのことはあなかしこ、跡の爲忌むなることぞ」などいへるこそかばかりの中に何かはと、人の心はなほうたてに覺ゆれ。年月經ても、つゆ忘るるにはあらねど、去る者は日々に疎し」といへることなれば、さはいへど、そのきはばかりは覺えぬにや、よしなしごといひてうちも笑ひぬ、骸はけうとき山の中にをさめてさるべき日ばかり詣でつゝ見れば、ほどなく卒都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。思出でて偲ぶ人あらん程こそあらめ。そもまた

鼎法師

程なくうせて、聞傳ふるばかりの末々はあはれとやは思ふ。さるは跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年を待たで薪に碎かれ、ふるき墳はすかれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞ悲しき。（徒然草）

四　鼎法師

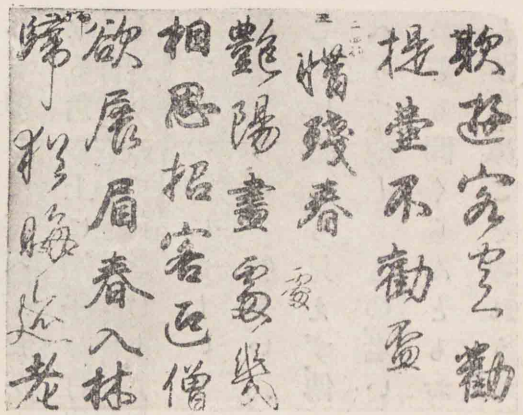
仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、おの〳〵遊ぶことありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻を押平めて顔をさしいれて舞ひいでたるに、滿座興にいることかぎりなし。暫しかなでて後拔かんとするに、大方拔かれず。酒宴ことさめて、「いかゞはせん」と惑ひあへり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れて、息もつまりければ、打割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、かなはですべきやうなくて、三足なる角の上に、雌子を打掛けて、手を引き杖を突かせて、京なるくすしがりゐて行きけり。道すがら、人の怪しみ見ることかぎりなし。くすしの許にさしいりて、むかひ居たりけんありさま、さこそは異樣なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きてきこえず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし」といへば、また仁和寺にかへりて、親しきもの、老いたる母など、枕がみに寄り居て泣きかなしめども、聞くらんともおぼえず。かゝるほどに、或者のいふやう、「たとひ耳・鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力をたてて引きたまへ」とて、藥のしべをまはりにさし入れて、かね

小野道風筆

小野道風
能書家
（康保三年歿）

四條大納言
藤原公任
（長久二年歿）

を隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳・鼻缺けうげながら抜けにけり。からき命まうけて、ひさしく病みゐたりけり。（徒然草）



五　和漢朗詠集

ある者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人、御相傳うけることには侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを、道風書かんこと、時代や違ひ侍らん。おぼつかなくこそ」といひければ、「さ候へばこそ世にありがたき物秘藏しけり。（徒然草）

白居易
字は樂天
支那唐代の詩人

坂上是則
古今集中の作者

和漢朗詠集
（藤原行成筆）

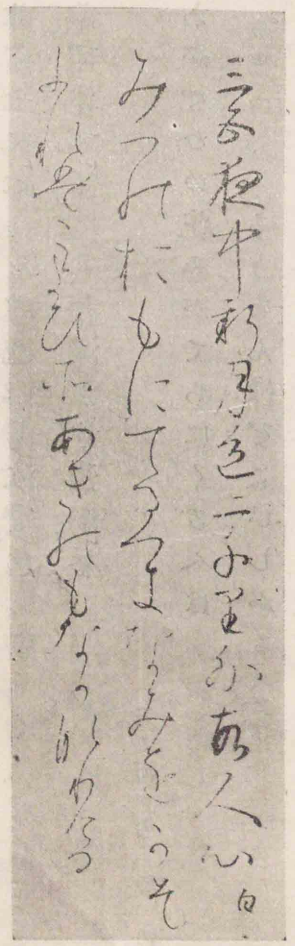
雪

雪似鵞毛飛散亂
人被鶴氅立徘徊

白居易

坂上是則

接續詞
みよし野の、山の白雪つもるらし
ふるさと寒くなりまさるなり



月
三五夜中新月色
二千里外故人心

白居易
源順

源順　梨壺五人の一人

みづのおもに照る月なみを數ふれば
こよひぞ秋のもなかなりける

菅原文時

菅原文時　道眞の孫　文章博士

花

誰謂水無心　濃艶臨秀波變色
誰謂花不語　輕澁激兮影動唇

凡河内躬恒

わがやどの花みがてらにくる人は
ちりなん後ぞこひしかるべき

白居易

懷舊

長夜君先去　殘年我幾何
秋風滿秋淚　泉下故人多

藤原爲頼　拾遺集中の歌人

よのなかにあらましかばと思ふ人

藤原爲頼

大江朝綱　音人の孫

無常

生者必滅　釋尊未免荼毘之煙
樂盡哀來　天人猶逢五衰之日

大江朝綱

僧正遍昭

なきが多くもなりにけるかな

すゑの露もとのしづくや世の中の
おくれさきだつためしなるらむ

藤代禎輔　文學博士　京都帝國大學教授（昭和二年歿）

一九　ワイマールより

藤代禎輔

ワイマールは小さき都にて、山水の景勝に富めるにも無之候へども、如何にも閑靜にて人氣良く、誠に居心地よき處に候。公園には、森の繁れる中を、イルムと云ふ瀧の川位の流ちよろ〳〵いたし居り、其の上には、鐵の欄干に石柱と云ふ

シルレル（西紀一七五九―一八〇五）

ゲーテ（西紀一七四九―一八三二）ともに獨逸の大詩人

ワイマール公園とゲーテ休息宅

厳しきもあれど、又丸太を組合せて架けし風流なる橋もありて、シルレルの腰掛、ゲーテの休息小屋など、何れも昔どほり保存せられて、古を偲ばしむる跡は到る處に散在致し、一々委しく點檢して、詩作との關係など取調べ候はば、餘程興味ある事ならんが、短日月の滞在にてはそれも出來かね候。とほり一遍の旅客として、目に觸れ候處を御報告申上候。

今日第一番に足を運びたるは圖書館にて、案内者の言葉によれば、カールアウグスト太公が露國の大賓某にむかひて「ワイマール第一の名物」と紹介せる處なりとか。はじめは、ゲーテが我が書齋にとて自ら設計したる建築物なる由。珍書・奇籍も夥しきことなるが、ゲーテ・シルレル始め、其の他有名なる人物の彫像・肖像畫など、貴重の品數々ありて、いまだに文學史の挿畫にて幾に其の俤を偲びゐたる名作の寶物に接し、トリッペルが靈腕に彫まれたる、アポロ其の儘との評あるゲーテが大理石像、ダンネッ

シルレル像（ダンネッケル作）

トリッペル（西紀一七四四―一七九三）スイスの彫刻家

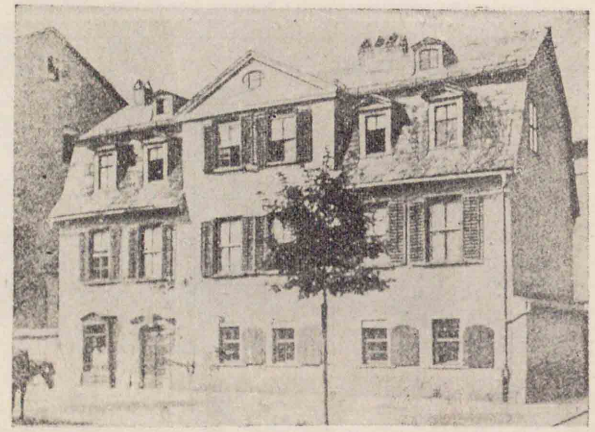
ゲーテ像（トリッペル作）

ダンネッケル（西紀一七五八―一八四一）獨逸の彫刻家

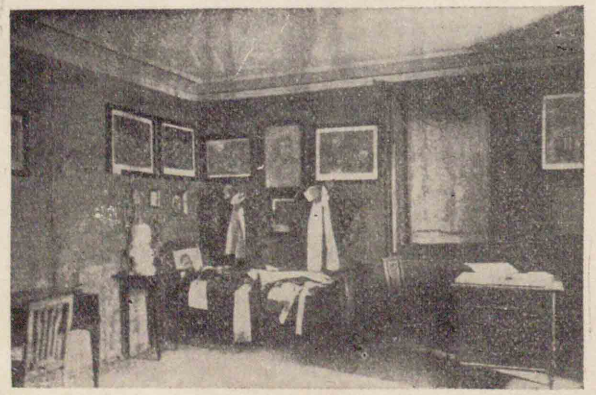
ケルが妙技を揮ひしシルレルの半身像など、凝然見惚れて、案内者に急きたてられ、不承々々歩を移すと云ふ始末、儘になるなら、何時までも此の地に居て、朝夕此等の逸品を眺めたしとの念もおこり候。

圖書館を出でてシルレルの住宅をおとづれ候。表よりの見つきは、とても立派と云ふ建物には無之候へども、窓の板戸の緑色に塗立てある様など、何となくゆかしき心地せられ、中に入りて、一階・二階は梯子段を見しばかり、三階に至りて、シルレルの應接室・書齋・臨終室を一覽致し候。一切の装飾品を取除けて、詩聖が使ひ慣れし文房具・椅子・寢臺・掛額等を据附けあるばかりなれば、至つて質素に候へども、此の内に寢食して、晩年の傑作を産み出せし現場と思へば、感慨かぎりなき次第、腐れ林檎の香を嗅ぎて、深更まで意匠をこら

シルレルの家（上）とその臨終の室（下）



したるは、此の机の前にやあらん、嗅煙草に睡魔を驅りて、神來の筆を馳せたるは此の窓下ならんなど、詩人ならぬ我も空想の天地に身を置きて、案内者の饒舌も耳に入らばこそ。臨終室を見るに及びて、其のあまりに狹隘なるに驚き、かゝる偉人が、此のむさくろしき部屋にて息を引取りたるかと、

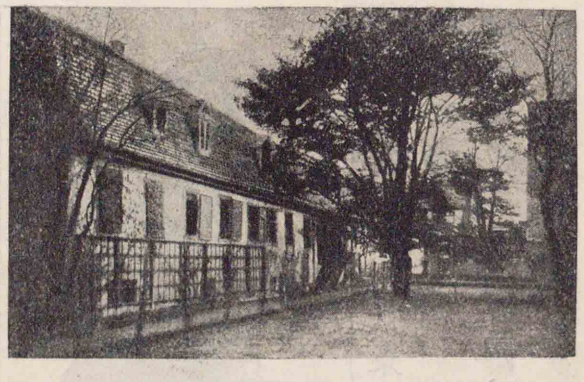


兩詩人の棺

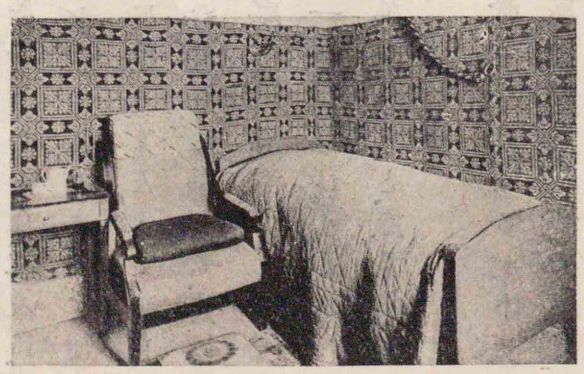
坐ろ暗涙に咽び候。

此處を立出で、國君の墳墓に詣で候。是はワイマール代々の君主が、遺骸を納むる圓天井の石室にて、ゲーテ・シルレルの棺も此の裡に安置有之、木棺の上部は月桂樹の葉を以て堆く蔽はれ、ゲーテの頭部には金製、シルレルのには銀製の月桂冠を供へたり。兩詩人の優劣は、存命中より兎角議論ありて、ゲーテ自身も「強ひて一人に團扇を上げずとも、これ程の詩人を二人まで出したりと、ドイツ國民は喜ぶべき筈なるを」といひたる位なるが、今此の金銀の差別を見て、勿論兩詩人の地位、若しくは其の長逝せる當時の

ゲーテの家（上）とその臨終の室（下）



事情に依るとは承知しながら、シルレルは死後に至るまで薄倖なりとの感をおこし候。併し身を布衣におこして、王者と同一の石館内に遺骸を納めらるゝは、比類なき名譽と感嘆いたし候。



これよりゲーテの住宅に赴きしが、流石宰相の地位にあり て、當代に時めきし詩人の事とて、シルレルの居宅などとは

比較すべくもなき程廣大なるものなれど、現今の程度より云へば、極めて質樸にて、是はた案外の感に打たれ候。

ゲーテの寢室に入りて、シルレルが臨終の際、ゲーテも病蓐に就き居りしかば、家人は、シルレルの死を告げなば病氣に障りなんとて祕しけれど、素振に悟りて、其の實を察し、潸然流涕したりとの一事を思ひうかぶれば、兩詩聖の交情は、東西・古今に例なき美事なりと、感涙禁め難かりき。

ゲーテ半身像

庭園に面せる一室に、シルレルの頭蓋骨を手にせるゲーテの半身像を見、そゞろにゲーテの詩の思出でられ候。

ワイマールの見物も一とほり相濟みたれば、明日此の地を發足致し、イエナを經てウルツブルグに赴くつもり、行く先の模樣は、おひ〳〵御通知可申上候。（帝國文學）

森鷗外

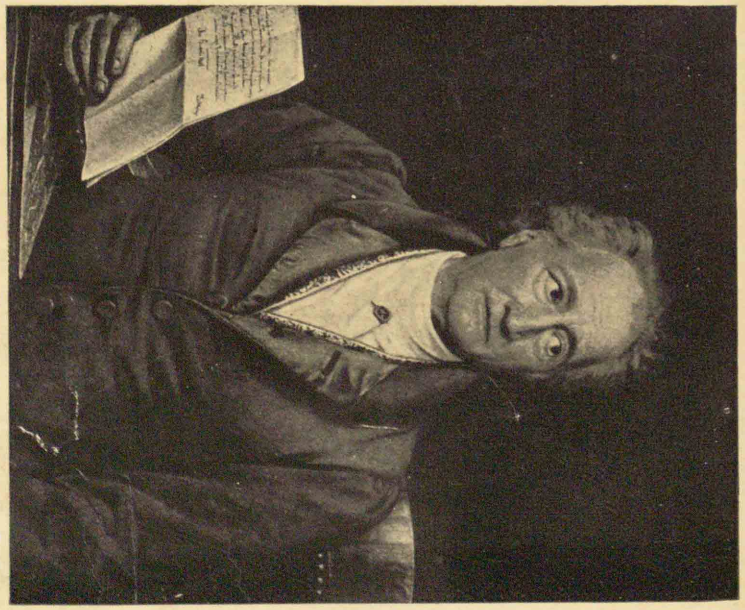
二〇　ゲーテとシルレル

ゲーテとシルレルとの性格は隨分懸隔してゐる。生立から見れば、ゲーテは精神的學問から出て自然に歸着した人で、シルレルは自然學から出て精神的境界に進んだ人である。千七百八十六年五月五日に、ゲーテは、「神に『理學』を授けられたのがありがたい」といふと、同じ年の四月十五日に、シルレルは、「もう十年程前から歷史を研究してゐればよかつた」といふ。ゲーテの哲學は自然を觀察して自得した所がたま〳〵スピノザと一致したのである、シルレルの哲學は思辨に本づいてゐて、後に哲學に對して懷疑に傾い

てからも、その心的事業の全範圍が推理的であつた。ゲーテの製作は觀照から出てゐるので、經驗のないことは書くことが出來ない。シルレルの製作は理想から出てゐるので、憑空結撰を得意とする。彼は必然の作品で、これは自由の作品である。ゲーテを豫言者とすれば、シルレルを宣教師としなくてはならない。その上、ゲーテは足跡全歐羅巴に遍く、閲歴上には王侯から乞食までを知つてゐて、自然と藝術とを我物にしてゐる。シルレルはシュワアベンとザクゼンとの間に蹋躇して、書生と小官吏との生活しか知らず、自然にも藝術にも親んだことがない。シルレルははじめてゲーテに逢つた頃に、「ゲーテと己との年齢の懸隔は大きくはないが、どうも生活上の閲歴と自己發展との懸隔が大きくて、所詮追ひつかれないだらう」と書いた。

ゲーテとシルレルとの間に懸隔があつて、それに伴なふ誤解も

シルレル



ゲーテ

あつたが、そのうちにシルレルの内生活が次第にゲーテに近づいて來た。千七百九十四年の夏、シルレルは保養の爲に九箇月間シュワアベンに歸つてゐて、それからエナの任地にきた。その時エナに自然學會があつて、その席上でゲーテとシルレルとが落ちあつて、一緒に會場から出た。二人は歩きながら、今聽いた講演の批評をした。「どうも話があんなに分析的にばかりなると、素人は自然學がいやになりますね」と、シルレルがいつた。「素人でなくても、專門家でも事によると氣味が惡いでせう。あんな風でなく、自然の全體が碎かれずに、全體の儘で、外圍の部分々々に向つて作用するやうに說く事ができさうなものです」と、ゲーテがいつた。

話は次第にはずんでゐて、ゲーテはそれにつられてシルレルの家に立寄つた。ゲーテは植物變形論をし出して、ペンで原植物の略圖を書いて見せた。シルレルにはゲーテの論理が善くわかつ

兩詩人の銅像

した。しかし最後にシルレルは頭を掉つて、「どうもそれは經驗ではなくて、理想ですね」といつた。さういふシルレルの意は、ゲーテにも解せられた。

次に話は藝術論に移つた。そシルレルはこの機會に、自分のゲーテを崇拜する情を抒べた手紙を寄せた。「この週には僕の誕生日が來るが、君の手紙が一番好い祝福だ」と、ゲーテは返事に書いた。「君とエナで逢つた日は、新時代を劃する日だ」といふことをも書き添へた。（ゲーテ傳）

二一 欣求

一

美のうるはしさは
夢のうち花瓶に美しい
書斎は窓のうきて
ほうの表を唐そのる

だが 白の眼はそを遮し
御上の庶物をみる
やれた翼と考へた望を
若汁になるもあの道路を
わたしはどちらが知らず
なぐわたしはどちらが迷はねばならず

わが眼にてみるなやみを
わが眼を耐めゆめ必ずを

二

そのせた林檎は美しく
口に入れた林檎は酸に若い
わたしは酸つた眼でみるか
それとも なぐ少く嘆めるか

現実はまだわたしに夢さめくれぬのに
わたしはあくまり夢みすぎてゐる
わたしはほとんど夢それるものをばまつ
跳に立つを食のやうだ

西田幾多郎
哲學文學博士
京都帝國大學名譽教授

二二　愛兒の死

西田幾多郎

回顧すれば余が十四歳の頃、幼時から最も親しかつた姉を失うたことがある。余は生來始めて死別のいかに悲しきかを知つた。余は、亡姉を思ふの情に堪へず、また母の悲哀を見るに忍びず、人なき處に到つて思ふまゝに泣いた。稚心に、もし余が姉に代つて死に得るものならばと、心から思うたことを今も記憶してゐる。

近くは明治三十七年の夏、旅順の戰にたゞ一人の弟が、敵壘深く屍を委して、遺骨をも收め得なかつた有樣、こゝに再び舊時の悲哀を繰返して、斷腸の思がまだ全く消失せないのに、今また己が愛兒の一人を失ふやうになつた。

骨肉の情、いづれも疎かなるはないけれども、特に親子の情は格別である。余はこの度、生來未だ嘗て知らなかつた沈痛な經驗を

得たのである。亡き我が兒の可愛いといふのは、なんの理由もない。たゞわけもなく可愛いのである。甘いものは甘い、辛いものは辛いといふの外はない。「これまでにして亡くしたのは惜しからう」といつて、悔んでくれる人もある。併し、さういふ意味で惜しいといふのではない。「女の子でよかつた」とか、「外に子供もあるから」などといつて慰めてくれる人もある。併しさういふことで慰められるものではない。

ドストエフスキー

ドストエフスキー　ロシヤの小說家（西紀一八二一―一八八一）

ゾニア　ドストエフスキーの愛兒

ドストエフスキーが愛兒を失つた時、「また子供が出來るだらう」といつて慰めた人があつた。氏はこれにこたへて、「どうしてどうして、ゾニアでなくては」といつたさうである。

親の愛は實に純粹である。その間、一毫も利害得失の念をさしはさむ餘地がない。たゞ亡兒の俤をおもひ出すにつれて、無限になつかしく可哀相で、どうにかして生きてゐてくれゝばよかつたと思ふのみである。若きも老いたるも、死ぬるは人生の常である。死んだのは我が子ばかりでないと思へば、理においては少しも悲しむべきところはない。しかし人生の常事であつても、悲しいことは悲しい。飢渇は人間の自然であつても、飢渇は飢渇である。人は「死んだものは、いかにいつても還らないからあきらめよ、忘れよ」といふ。しかしこれが、親にとつては堪へがたい苦痛である。時はすべての傷を癒すといふのは自然の惠であつて、一方から見れば大切なことかも知れないが、一方から見ればなさけないことである。なんとかして忘れたくない、何か記念を殘してやりたい。せめて我が一生だけは思出してやりたいといふのが、親の誠であ

アービング
米國の文學者（西紀一七八三―一八五九）

る。昔ウォシントン・アービングのスケッチブックを讀んだとき、「他の心の疵や苦痛は、これを忘れ、これを治せんことを欲するが、ひとり死別といふ心の疵は、人目を避けてもこれを溫め、これを抱かんことを欲す」といふ語があつた。今まことに、この語が思ひ合されるのである。折にふれ物に感じて思出すのが、せめてもの慰藉である。死者に對しての心づくしである。このかなしみは、苦痛といへばまことに苦痛であらう。

アービング

古人
紀貫之

しかし親は、この苦痛の去ることを欲しないのである。「死にし子顔よかりき。」「をんな子のためには親をさなくなりぬべし」など、古人もいつたやうに、親の愛はまことに愚癡である。冷靜に外から見たならば、たわいない愚癡と思はれるであらう。し

カント
ドイツの哲學者（西紀一七二四―一八〇四）

カント

ゲーテ
ドイツの詩人（西紀一七四九―一八三二）

かし余は、この人間の愚癡といふものの中に、人情の味のあることを、この度つくづく悟つた。カントがいつたやうに、物にはみんな直段がある。ひとり、人間は直段以上である、目的その物である。いかに貴重なものでも、それはたゞ人間の手段として貴いのである。世の中に人間ほど貴いものはない。物はこれをつぐなふことが出來るが、いかにつまらない人間でも、一のスピリットは他物を以てつぐなふことは出來ない。そしてこの人間の絶對的價値といふことが、己が子を失うたやうな場合に、最も痛切に感じられるのである。

ゲーテがその子を失つた時、「死を超越して」というて仕事を續けたといふが、ゲーテがこの語をなした心中には、もとより仰ぐべき

偉大なものがあつたでもあらう。しかし人間の仕事は、人情といふことを離れて外に目的があるのではない。學問も事業も、究竟の目的は人情のためにするのである。そして人情といへば、親が子を思ふより痛切なものはなからう。徒に高く構へて、人情自然の美を忘れるものは、反つてその性情の卑しいことを示すに過ぎない。「征馬不レ前人不レ語ラ　金州城外立ツ斜陽ニ」の句があつて、愈〻乃木將軍の人格が仰がれるのである。

とにかく余は今、我が果敢ない死といふことによつて、多大の教訓を得た。名利を思うて煩悶絶間のない心の上に、一杓の冷水を浴びせかけられたやうな心持がして、一種の涼味を感ずるとともに、心の奥まで、秋の日のやうな清く溫い光がてらして、すべての人の上に純潔な愛を感ずることが出來た。そして次の問題について、特に心を動かしたのである。一體、いままで可愛らしく話したり歌つたり遊んだりしてゐたものが、忽ち消えて壺中の白骨となるといふのは、いかなる譯であらうか。もし人生は、これまでのものであるといふならば、人生ほどつまらないものはない。こゝには深い意味がなくてはならない。人間の靈的生命は、かくも無意義のものではない。死の問題を解決するといふのが、人生の一大事である。死の事實の前には、生は泡沫のごとくである。死の問題を解決し得て、はじめて眞に生の意義をさとることが出來るのである。

如何なる人も、我が子の死といふことに對しては、種々の迷をおこさぬものはなからう。「あれをしたらばよかつた、これをしたらばよかつた」などと、思うて返らぬことながら、徒なる後悔の念に心を惱ますのである。併し、何事も運命と諦めるより外はない。運命は外から働くばかりでなく、内からも働く。我々の過失の背後

には、不可思議の力が支配してゐるやうである。後悔の念のおこるのは、自己の力を信じ過ぎるからである。かゝる場合において、我々は深く自己の無力なことを知り、おのれを棄てて絶大の力に歸依するとき、後悔の念は轉じて懺悔の念となり、心は重荷を卸したやうになり、自ら救ひ、また死者に詫びることが出來るのである。

（思索と體驗）

北村透谷
名門文學者
東京の人
（明治二十七年歿年二十七）

二三　山庵雜記

北村透谷

一

夢見まほしやと思ふ時、あやにくに夢の無きことあり、夢なかれと思ふ時、うとましき夢のもつれ入ることあり。寤むる時亦かくの如し。思はざらんと思ふに思ひ、思はんと思ふに思はず。さりとて意の如くならぬをば、意の如くせましと思ふにもあらず。靜に傾き盡きなんとする月を見れば、よろづ意の儘にならぬものぞなき。徐に咲きいづらん花を待つに、よろづ心に任せぬものぞなき。如意却つて不如意、不如意却つて如意、悲しむも何かせん、歡ぶも何かせん。「無心」を傭ひきたつて、かなしみをもよろこびをも、同じ意界に放ちやりてこそまことの樂はきたるなれ。

（玉舟筆）

二

早曉臥床を出でて、心は寤寐の間に醒め、意は意無意の際にある時、一鳥の聲を聽けば、忽としてわれ天涯に遊び、忽としてわれ塵界に落つるの感あり。我に返りて後、その聲を味はへば凡常の野雀

のみ。然るに、我が得たる幽趣は地に就けるものならず。こゝに於てひそかに思ふ、感應我を主として他を主とせざることを。

三

人間の心中に大文章あり。筆を把り机に對する時においてよりも靜默瞑坐する時においてゝ燦爛たる光明あること多し。心中の文章より心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の文章を裝はんとするは、文字の賊なるべし。古より、卓犖不羈の士、往往にして文章を事とするを喜ばず。文字の賊とならんより、心中の文章に甘んじたればならん。

四

身心を放ちて、瞑然として天造に任せんか、身心を收めて、凝然として寂定に歸せんか、或は猖狂、或は枯寂、猖狂は猖狂の苦味あり、枯寂は枯寂の悲參あり。魚躍り鳶舞ふを見れば、聊か心を無心の境に驅ることを得、雨そぼち風吹きさそふにあひては、忽ち現身の心に還る。自然は、我を弄するに似て弄せざるを感得すれば、虛もなく實もなし。

五

世にありがたき至寶は涙なるべし。涙なくては情もなかるらん。涙なくては誠もなかるらん。狂ひに狂ひしバイロンには、涙も細繩ほどの役にも立たざりしなるべけれど、世間おほかたの者を繫ぎ止むるは、この寶なるべし。遠く行く人の足をとどむるもの、猛く勇む雄士の心を弱くするもの、情差ひ歡薄らぎたる間柄をひきしむるもの、涙の外には求めがたし。人世涙あるは、原頭に水

バイロン　英國の大詩人（西紀一七八八―一八二四）

バイロン

あるが如し。世間もし、涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば、甚しく悲しきことは跡を絶つに幾からんか。

六

孤雲・野鶴を見て、別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども、苦海・塵境を脫離して、一身を挺出せんとする人間の道にあらず。苦海・塵境に清涼の氣を輸び入るゝにあらざれば、詩人は一の天職を帶びざる放蕩漢にして終らんのみ。

七

他を議せんとする時、尤も多く己の非を悟る。頃者激する所ありて、生來甚だ好まざる駁擊の文を草す。草し終へて靜に內省するに、人を難ずるの筆は、おなじく己を難ぜんとするに似たり。是非曲直、輕々しく判じ難し。如かず、修養練磨して、妄りに他人の非

を測らざることをつとめんには。

八

大なる悔改はまた一個の大信仰なり。「罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし」とは、カーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて明日の是を期するは、信仰に入るの要諦にして、罪人の必ず自殺すべしとせざるは、これが爲なり。罪の重荷は、忘れざるによつて忘るゝを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は卽ち信仰の生涯なるか。（北村透谷集）

カーライル
英國の文學者
（西紀一七九五―一八八一）

二四　透谷を憶ふ

島崎藤村

私が透谷と交はつたのは、亡くなる前の四年間位に過ぎないが、しかしその短い間が、私に取つては何か一生忘れられないものであり、透谷が死んだ後、その書き殘されたものを見る機會があつて、

長い年月の間に、あの友人のことを考へて見ると掘つても掘つても盡きないやうな種々なものが、後から〳〵と出て來るやうに思はれた。これほど、私が透谷のことを忘れないといふのも、一つは、自分の年の若く心の柔かな青年時代に、あの友人と知合になつたからでもあり、一つは、あの友人の書き遺したものを纏めておかうと思ふほど、深い緣故のあつたからでもあるが、就中私があの友人から感化を受けたことの深かつたからであらう。彼こそは、まことの天才と呼ばるべき人であつたと思ふ。

露西亞に「露西亞文學の現實性と理想性」を書いた人があるやうに、吾が國にも「日本文學の現實性と理想性」ともいふべきものを書いてくれる人があつたら、その人は日清・日露兩戰役へかけての時代を背景として、すくなくとも、二人の文學者の生涯を見逃すまいと思ふ。

一人は二葉亭だ。今一人は透谷だ。この二人は、書いたものでも歩いた道でも、第一その生活の基調からして隨分違つたものといふ氣はするが、意味の深い未完成のまゝで、この世を去つたことだけは似てゐる。

「文學は男兒畢世の事業とするに足りない」といふ意味の言葉を殘して、晩年を露西亞の旅に送つた二葉亭には、默然と手を拱いて、時代に對して行つたやうな趣がある。二葉亭の生涯には、藝術と實行との分裂ともいふべきかなしみが味はゝれる。そこに空虛がある。滿たされない空虛がある。その空虛は、近代に勃興した科學的文明が、藝術の世界に齎したかなしみといふ事も出來ると

思ふ。透谷には二葉亭に無い力があつた。彼は、二葉亭が藝術と實行との間に感じたやうな空虛を感じなかつた。

見て來ると、透谷のやうなパッショネートな性質の人が、どういふ方向を執つて動いて行つたかといふことが、今更のやうに感ぜられる。彼をしてさういふ方向を執らせたのも、彼の若い生命におこつて來た嵐の力だといふことが感ぜられる。彼が內部の生命を論じたり、創造の力を說いたり、精神の自由を唱へたりした幾多の言說を讀みかへして見ると、私は隨所にその心の芽を見つけることが出來るやうに思ふ。

透谷に尊いところは、何事も本質的に見てかゝらうとしたことである。

「ある宵、われ窓にあたりて橫たはる。ところは海の鄕、秋高く天朗にして、よろづの象、よろづの物、凜乎として我に迫る。恰も我

國府津時代
明治二十六年
國府津海岸に轉地の頃

が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も、我が力なく、能なく、氣なきを罵るに似たり。渠はかくの如く我に透徹す。而して我は地上の一微物、渠に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。」

これは、彼が國府津時代に書いた「一夕觀」の一節である。「よろづの象、よろづの物、凜乎として我に迫る」とは、いかにも詩人としての彼の面目をよく語つて居る。彼は何事にも、この透徹と悟達とを期した。彼は、自身にも言つて居るやうに、物に感ずることが深くて、悲に沈むことも尋常でなかつた。又美しいものに意を傾けることも、人に過ぎて多かつた。けれども、彼が物に感じ、美しい物に意を傾けるといふは、物を通じ形を鑿ちて、その心髓に徹しなければ休むことを知らないやうな熱意から來てゐた。彼は俗韻俗調の詩人が、徒に自然の美を玩ぶことを憎んだが、その彼自身は、自然の美に動かされることのすくないのを自ら怪しむほどの多感な

詩人であつた。彼が生命の内部に突き入らうとして、審美上の詮索にのみ滿足せず、道德の創造性にまで考察を向けた熱心には驚かれる。「生命のないところに信仰はない、信仰のないところに道德はない」と、彼は言つて居る。この内觀が、主我的な瞑想に墮ちて行つたのは、彼としては止むを得なかつたことだらう。

透谷の文學的生涯は、彼の早い結婚と共に開けた。人として彼が歩いた路は、近代の生活を考へるのに取つて、いろ〳〵な暗示を與へる。彼には天才の誠實があつた。その誠實が彼を導いて、短く傷ましくはあるが、しかし意味の深い生涯を送らせたと思ふ。

（飯倉だより」に據る）

二五　作ることと見ることと

岩城準太郎

作ることと見ることとは、人心の内部に存する止むに止まれぬ

要求である。作るは自ら或事物を作爲することであり、見るは他人の作爲した事物を觀覽することである。これは實用的のことであると、遊戯的のことであるとを問はず、あらゆる人生の事物に就いて見られる現象である。こゝには唯作ると見るといふ二つの言葉を出したけれども、そは代表的の意味に過ぎないので、作るには、制作すること、行爲すること、演奏すること、言説すること、その外すべて創造すること、表現することを包括するのであり、見るには、見聞すること、聽聞すること、玩味すること、讀解すること、その外すべて愛用すること、鑑賞することを包括するのである。この二つの作用は、人間の本能的に固有してゐる衷心の要求から生れるものである。

子供のすることを見ると、何事によらず外界の事物を見たがる。聞きたがる。知りたがる。翫びたがる。味はひたがる。そして

又之を摸倣したがる。言ひ表したがる。作りたがる。爲したがる。演じたがる。即ち子供は、自ら何事をか作爲し、表現したくてたまらないのである。この二つの要求は、本來同じ心持から出てゐるので、他人の作爲し、表現した事物を見たがる心は、即ち自己みづから表現し、作爲したがる心であり、自己が表現し、作爲する心は即ち他の作つた事物を鑑賞し觀賞する心である。飴屋の笛に聞きほれる心持は、自らハモニカを吹く心持であり、竹きれで戰爭ごつこをする心は、即ち活動寫眞の立ちまはりを喜び見る心である。二つはその現れる形を異にしてゐるけれども、畢竟同一の心持の二つの方面になるのである。大人の心理もこれに變りはない。

右は極めて一般的に言つたので、人生百般の現象に廣く當てはまる事理である。だから之を狹く藝術の上だけに適用し、更に一層狹く文學だけに適用すると、もつと具體的に、もつと剴切に說述

することが出來るのである。之を文學に限つて說くならば、作るは創作であり、表現であり、制作であり、見るは讀解であり、鑑賞であり、批評である　文學の起源に關しては、學者の間に相當に議論のあることであるが、その何れに從ふに關らず、人間の欲求としてこの二つが强くはたらいてゐることは爭はれない。自然の好景に接する。人事の曲折に遭ふ。之に接し、之に遭うて刺戟を受ける。自分の心に何等かの反應を起す。その反應は之を表現しないで葬り去るには忍びない價値の感を伴ふ。或は默殺し去ることの出來ない愛惜の感を伴ふ。或は無意識に表現してしまふ程强い引力を感ずる。かうしてこれを一つの創作の形にまとめ、これに一つの表現形式を與へるやうになる。同時に又他人がこのやうな創作表現を提供した場合に、これを讀み味つて、心理に刺戟を受ける。反應が起る。まだ見ぬ好景に身自ら接する思をする。或

は曾て知らない一場の風光を心内に創造する。又曾て見たことのある光景を再現する。人事に關するものなら、まだ經驗しない曲折に面とむき合つた思をする。或は又以前に經驗した事象に再び邂逅したやうに想はれる。これらの感味に引きつけられて讀まないではゐられない、好惡是非の感を起さないではゐられないことなる。かうして創作と批評とが起り、表現と鑑賞とが成立つのである。

かう觀察して來ると、創作と批評、表現と鑑賞とは、極めて密接な關係を有つてゐる事柄であつて、創作する心なしに批評することは困難であり、鑑賞する心なしに表現することも無理である。創作家と批評家とを區別して考へるのは、全く便宜上のことに過ぎないので、創作の心持を缺いてゐる人に批評の出來る筈もなく、批評の心を有たない人に創作の出來るわけもない。表現の巧拙は

直接に鑑賞の力に關係し、鑑賞の當否は常に表現の腕前に關係するので、鑑賞の專門家とか、表現の專門家とかいふものは、要するに低級な範圍にのみあり得るものである。批評は見方によつては一種の創作であり、創作は又一種の批評であらねばならぬ。

（表現と鑑賞）

二六　おなじ湊

西行法師

友になりておなじ湊をいづる舩のゆくへも知らず漕ぎわかれぬる

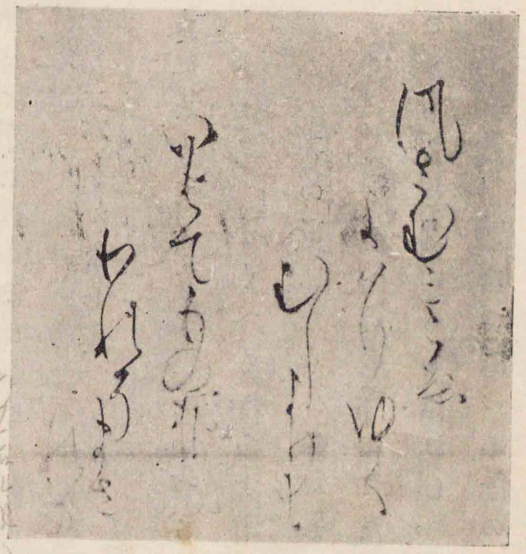
あかつきの嵐にたぐふ鐘のおとをこゝろの底にこたへてぞきく

こゝろなき身にもあはれは知られけり

鴫たつ澤のあきのゆふぐれ

摂政太政大臣　藤原良經

藤原良經筆



摂政太政大臣

よし野山
花のふるさと
あとたえて
むなしき枝に
春風ぞ吹く

式子内親王　後白河天皇の女

花は散りその色となくながむれば
むなしき空に春雨ぞ降る

藤原家隆　新古今集撰者の一人

霞たつすゑの松山ほのぐと
波にはなるゝ横雲の空

藤原定家

旅人の袖ふきかへす、あきかぜに
ゆふ日さびしき山かげの桟

宮内卿

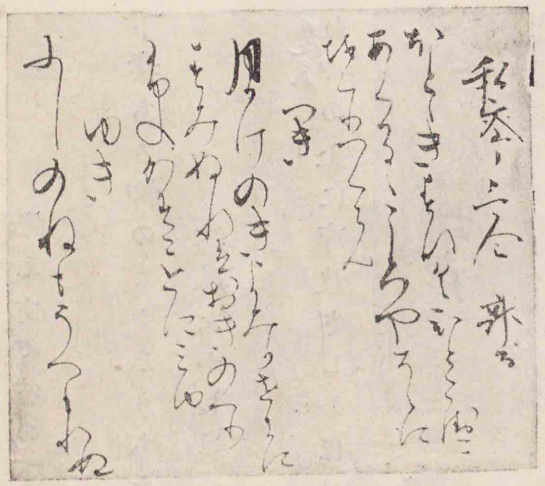
うすく濃き野邊の
緑の若草に
あとまで見ゆる
雪のむらぎえ

藤原俊成

まれにくる
夜はもかなしき
まつかぜを

宮内卿　後鳥羽天皇の宮女

藤原俊成筆蹟



宗尊親王
後嵯峨天皇第二皇子

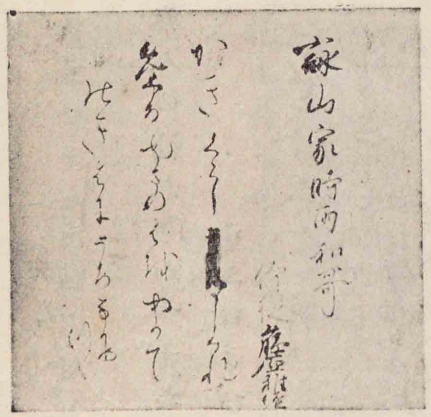
絶えずや苔の下にきくらむ　　宗尊親王

下葉ちる柳のこずゑうちなびき
秋風たかしはつかりのこゑ　　能因法師

能因法師
俗名稱永愷

ねやの上に片枝さしおほひ外面なる
葉びろかしはに
霰ちるなり　　藤原雅經

藤原雅經
新古今和歌集撰者の一人



藤原雅經筆蹟

うつりゆく
雲にあらしの
聲すなり　　藤原雅經

良暹
後拾遺集中の作者

ちるかまさきのかづらきの山　　良暹法師

寂蓮
俗名藤原定長

さびしさに宿をたちいでてながむれば
いづこもおなじ秋の夕ぐれ　　寂蓮法師

藤原清輔
續詞花集の撰者
治承元年歿

むらさめの露もまだひぬ槙の葉に
霧たちのぼる秋のゆふぐれ　　藤原清輔

冬がれの森のくちばの霜のうへに
おちたる月の影の寒けさ

二七　嵯峨と大原

岩城準太郎

一

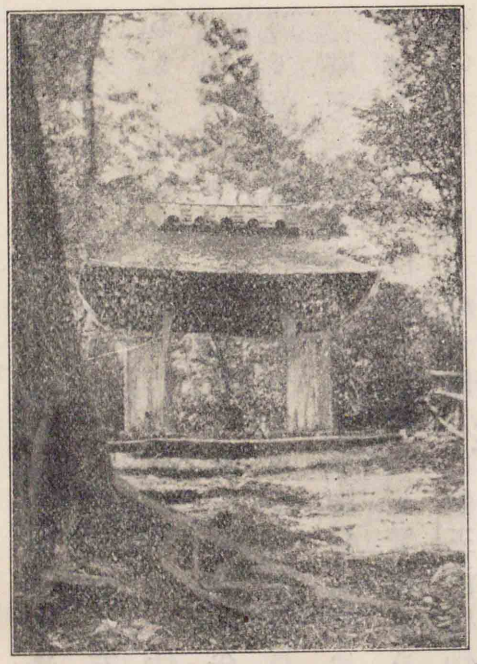
洛外といふ傳統的な匂ひのする言葉を、此の日ほど清新な感じで思ひ浮べたことはなかつた。近頃流行の「郊外」といふ言葉では京都の周圍の感じが現はれない。やはり洛外といふに限る。

嵯峨野の秋といふと、わけもなく物語めいた聯想が起つて古典的な幻影が現はれて來るが、此の日の嵯峨野は格別伸び〳〵として、そのかみを細想するにふさはしいものであつた。やはり嵯峨は秋に限る。

枕草子に、藤原齊信が西の京から歸つて、宮中の女房達に其の物語をする一條がある。齊信が西の京の荒廢の模樣を話すと、或る女房が「瓦の松はありつや」と、白樂天の文句を引いて問ひかけたとあるが、西の京は當時既に荒廢してゐたのである。今日でも此のあたりをそゞろ歩きすると、瓦の松はありつやと言ひたくなるやうな場所柄である。

白樂天
名は居易、唐の詩人

秋の日は溫い日ざしと、冷つこい曇りと、濕つぽい霧がごちやんぽんに來る。北山から西山へかけて、長々と通つてゐる田舍道を、小春日和の明るい光の中に歩くのは、全くのんきな氣持である。忽ち時雨雲が愛宕山を包んで見る〳〵衣笠山から雙が岡にかけてさつと時雨れて行くのは、又一幅の繪とも眺められる。その後で龜山から附のある潤ひを感ぜしめる。



祇王寺惣門

小倉山にかけて、薄い霧をわたしてゐる工合は、頗るしつとりと落

清涼寺の西門を出て、小倉山の方に進むと、寂びた籬落の間をおのづと山本の林に入る。烏瓜の赤いのと野菊の薄紫とが目にとまる。愛宕への別路を右に見送つて、落葉の深い林の奥に小高く登つて行くと、壊れかけた小柴垣を左右にして茅葺の小さな門がある。薄暗い木立の間の苔むした一仕切の地に、さやかな庵室の立つてゐるのが透かし見られる。平家物語にある往生院の遺跡で、通稱祇王寺といつてゐるのはこれである。

庵室を音なうて持佛堂を拜む。暗い厨子の中に五體の坐像が並んでゐる。白衣の尼さんが蠟燭をさゝげて順々に照してくれるのを見ると、左から母刀自、祇王、清盛、祇女、佛、いづれも柔和な相を小さく刻まれて寂然と端坐してゐる。落葉に埋まれた裏山から流れる霧が庵室の中まで立ちこめるのである。

庵を辭して小倉山の木下闇を細い徑を辿つて二尊院へ出る。

定家　藤原定家　鎌倉時代の歌人

去來　向井兼時　肥前の俳人（寶永六年歿年五十三）

楓の紅葉は昔ながらに色濃く染まつてゐた。定家の山莊と相對して古歌の風情が漂ふのである。院の大門前の清楚な參道を下り盡して、直ちに右に折れると、草紅葉をわけて、田圃道に入らねばならぬ。竹籔と雜木林との間を拔けて墓地に入り込む。

苔を拂つても刻銘の讀めさうに思はれぬ五輪塔が立並んでゐるが、いづれも三尺に充たぬ小さいものである。その間に更に更に小さい自然石の墓が唯一つある。目の粗い竹垣で圍つて、竹筒の花立が砂利の間に挿しこんである。石の面には「去來墓」の三字が無造作に刻つてあるだけである。

墓地を出で同じ徑を左に折れると、生垣續きの一圍があつて、中程に低い門が離に埋もれてゐる。門の中には丈の高い尾花が折ふしの風にそよいでゐるのが見える。それを拔けて更に高い柿の木が、紅葉した葉をふるひ落して殘る枝々に、豆のやうな赤黃ろ

柿主の句
柿ぬしや梢は近きあらし山（去來）

い實を鈴なりにつけてゐるのが見える。門には小さく「落柿舍」の木札がうつつてある。

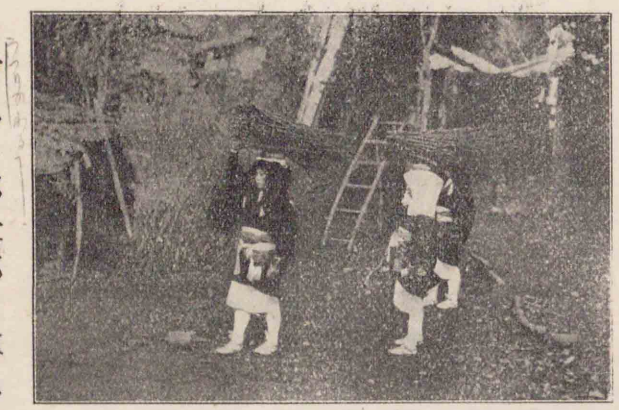
庵主の俳人は、芭蕉等が一つ蚊帳に五六人もはいりこんで夜通し話をしたと傳へられる座敷の縁側に蒲團を出して、いろ〳〵ともてなしてくれる。小さい庭は秋深い土の香も落附いてゐた。「柿主」の句を刻んだ石には蔦がまつはつて、これも紅葉してゐる。ひいやりと嵐山の頂からおろして來る風に、屋根より高い樹の上から豆柿が一つころりと落ちる。

二

賀茂の河合を渡つて、高野川沿の道を、奥へ奥へと行く。出町橋を東へ渡る時、おつかぶさるやうに行く手に立つてゐた比叡の山が、行つても〳〵、右手についてまはる。圓く大きい頂上四明のあたりが巨人の頭のやうにも見えて、くわつと見開いた眼ににらめ

八瀬
京都府愛宕郡八瀬村
大原女

られると、どうしてもそれから逃れられないのだとも思へる。比叡は魔物のやうに麓行く人を魅して、底知れぬ眞闇なあの山懷へ引つぱり込まねば承知しないのである。私達は、いつまでも〳〵此の山の麓を廻つてゐた。



八瀬は傳説の里であり、詩歌の郷でもある。そして又神祕的な暗さを有つた仙境である。御大喪の際に、黑い牛やあめ牛を牽いて、精靈のやうに此の里から出て來るものがあるが、それが濟めば直ぐさま引込んで、そのまゝ音沙汰がない。又紺飛白を著て出て來る大原女は、仙境の黑い蝶々のやうに、不思議な影を現代都

市に落しながら、又音もなく跡を消してしまふ。

山脚が兩方から迫つて、段々細くなる路を、爪先上りに進むと、又山が開けて此の八瀬の村に出る。更に山の閉ぢる谷あひに大原の里がある。

東は比叡の山つゞき、横川から小野へと波うつて奥へ連なり、西は小鹽の山が南北に裾を伸してゐる。雪が深く積つた此の一寰を想像する。數奇な運命に弄ばれた皇子の沈痛な面ざしが空想せられる。蓑を著、笠を冠つた年若い貴公子が、深い雪に力强く兩足をふみ込んで、やつて來る。夢かと思ふ對面に、二人は唯手を執つてさしぐんだ。雪は尚も降りしきる。暗い山裾の、暗い〳〵雪空は、此の劇的場面を覆つて、幽玄な鬼氣の漲るものにした。小野はやはり黑い蝶々と黑い牛との里である。

皇子　惟喬親王

貴公子　在原業平

路は尙奥深く入つて窮りがない。とある山裾に、深い林の中を

細い石段々の坂路が上つてゐる。行詰まつたところに小やかな門が覗かれる。寂光院の石標が雨じやれて立つてゐる。門を入ると、小やかな池がある。小やかな御堂がある。そしてさゝやかな書院がある。森閑として人氣のない一境である。音なふと白衣に墨染をはをつた尼僧が現はれる。

寂光院　大原村にある聖德太子の開基

法皇　後白河法皇

法皇の御幸は御輿であつた。あの長い山路を、初夏の草をわけて練つて來たのかと思つて見る。阿波内侍は此の尼僧のやうにしとやかに、もの靜かに御迎へ申したのかとも思つて見る。書院の襖にある御幸の繪は、更に人を遠い幽かな昔に誘ふ。尼僧の導くまゝに、佛前に詣でて、傳來の什物覺一本平家物語を拜見する。大册寫本十二卷の中、御幸の卷と灌頂の卷とをとり廣げて、尼僧が讀み下してくれる。私は流布本を膝にして、對照しながら之に聞入るのである。秋の山の木立を流れる空氣のやうに澄んだ聲で

女院　建禮門院安德天皇の御母
大納言局　安德天皇の御乳母平重衡の妻

ある。秋の湖の深い淵に湛へる水のやうに清らかな聲である。近く迫る翠黛山の蔭が落ちて、やゝ暗い障子の中は、墨染の衣を一層影深く見えしめた。女院を始め奉り、大納言局等の遠き世の靈を呼び起すやうに、朗讀の聲は暫く小暗い書院の中を流れた。

更に案内せられて、御堂に詣でた。本尊地藏菩薩の慈光が柔らかに堂内に漲つてゐる。女院の木像がその幽かな光の中に端然と合掌していらせられる。公家の溫雅に武家の俊邁を加へた端正な御相である。一鳥の聲すらも音せぬ靜かな山寺は、日高うして既に黃昏の迫るを覺え、遠き世に馳る思ひは、暗い所暗い所へと引入れられる。六道の苦を體驗せられた女院の暗い御生活がやにくに此の落飾の御姿につきまとふのである。

辭して大原の里に出ると、比叡は又魔物のやうに、眞黑に立ちふさがつてゐる。秋の日はもう暮れかけた。（國文學の諸相）

穗積八束　法學博士　東京帝國大學法科大學長　貴族院議員（大正元年歿　年五十三）

二八　國家の獨立

穗積八束

一定の土地を領域として、民衆こゝに共同の團體を爲し、唯一の主權によりて統治せらるゝ社會の形體を稱して、國家と謂ふ。

國の領土は、國の存在と統一とを表す。國土は國民の安宅なり。外權の侵犯を防衞し、獨立自營、以て世界に立つ。この神州瑞穗の國は、祖先の經營開拓せる處、祖先の墳墓の故域にして、子孫の永くその生を安んずべき樂土たり。この美麗なる山水は、我が數千年の歷史の記念たり。新に不毛の地に漂泊し、植民移住したる者も、猶、その國を愛す。況や到る處、祖先千古の經營の跡を遺し、山川草木、悉く皆古人の遺愛にあらざるなきにおいてをや。又、況や海陸産に富み、風土溫和にして民生を厚うするに足るにおいてをや。我が國土は、山川草木の美を以て、祖先の遺跡を畫きたる日本歷史

その物にして、之を愛惜するは、我が既往の存在を愛惜するなり。之を愛惜するは、獨立自衛の經濟を愛惜するなり。異種の人をして、この祖先の遺跡を冒瀆せしめず、この民族自營の根據を占奪せしめざるは、祖先及び子孫に對する吾人の責務なり。これ、やがて國の獨立を防衛する所以なり。

國の人民は國の本體なり。國民は、合同風化して、以て獨立の團體を爲す。その團體が、歷史上偶然の投合に出づるも、猶、相依り相愛す。況や、同祖の遺胤たる我が同胞においてをや。我が國は數千年の久しきに渉り、未だ深く異種の人に交らざりしが故に、風敎の純一を保持し得て、團結の心、共愛の情、俱に甚だ大なり。而して奉公、愛國の精神は、民族の天性に具ふる所にして、日本國民はこの特質を發揮して、以て外侮を禦ぎ、千秋渝る所なし。我が國がこの國體を永遠に維持し得るもの、一にこゝに職由す。史上、或は、その

國土を同じうし、その國名を一にするも、その本體たる民族は、早く既に滅亡に屬し、祖先の墳墓を異種の人の手に委したる類なきにあらず。固より、我と日を同じうして語るべからざるなり。若し我が民族にして亡びんか、日本の山水あり、日本の住民あるも、我が日本國は存在せざるなり。

國の主權は、國の獨立を代表す。主權なければ統一なし、統一なければ國家なし。國の獨立の存在は、獨立主權の存在に係る。主權とは社會最高の主力にして、外部に對して獨立なる權力を謂ふ。主權を防衛するは、國の獨立を防衛するなり。我が國は、萬世一系の皇位を以て主權の存する所とす。皇位は天祖の靈位にして、皇胤之を受け、天壤と與に窮りなし。神聖なる皇位を侵すあらば、その國の主權を侵す者なり、國の存在を毀損する者なり。これを防護するは、國の獨立を防護するなり。共和の約束に因る主權は、民

人之に服從すれども、之を崇拜せず。我が主權は天祖の威靈にして、社會を保護する用を爲すと同時に、神聖侵すべからざる特質を有す。主權は社會を保護するが故に、之を尊重し之に服從すべしといふは、その服從すべき原因を示すなり。我が民族が之を神聖なりとして崇拜するの情は、利害の念を超絶して、潔白なる特殊の風教に由るものなり。萬世一系の皇位を拜するは、我が獨立の主權を敬愛するなり。獨立の主權を敬愛するは、國の獨立を愛重するなり。これ、奉公・愛國の情が、我が神聖なる皇位に對して發表せらるゝ所以なり。（愛國心）

二九　建國の歌

北原白秋

一

そのかみ、天地開けしはじめ、
げに萌えあがる葦芽なして、
立たしし神こそ
國の常立。
いざ、
いざ仰げ、起ちかへり、
かの若々し神の業を。

二

惟ふに、日靈の大御神の、
げに言よさし給へる御詔、
知らせよ、皇孫、
三つの寶と。
いざ、

いざ仰げ、起ちかへり、
豊葦原の中つ國を。

三

神武の御代こそ荒ぶる和し、
げに現神、宮太敷きて、
はじめて築かせし
國の礎。
いざ、
いざ仰げ、起ちかへり、
神ながらなる崇き道を。

四

こゝにぞ、明治の大き帝、

げに晴れわたる青高空と、
更にし照らさす
四方に八隅に。
いざ、
いざ仰げ、起ちかへり、
わが彌榮の日の出る國を、

五

依り合ふ天地極み知らず、
げに天皇の御稜威盡き ず。
誇れよ、國民、
われら榮あり。
いざ、

いざ仰げ、起ちかへり、
たゞひとむきの日本魂を。

三〇 蒙古來

德富蘇峰

吾人は北條氏の絶對的隨喜者にあらず。されどいかなる嚴正なる、若しくは精刻なる批評家も、北條氏の政治には、その程度に相違こそあれ、隨喜するを禁ずる能はざるべし。神皇正統記の著者が、「大方泰時心正しく、政素直にして、人をはぐくみ、物に驕らず、公家の御事を重くし、本所の煩を止めしかば、風の前に塵なくして、天が下靜まりき」と謂ひしは、持平の見なるに似たり。乃ちその卓越なる史識が、動もすれば褊固なる繩墨に拘束せられたる白石さへも、時宗を散々に非難しつゝ、「たゞ大元の兵頻りに我が國に寇せしを、己鎌倉に在りながら之を破る。この一條、その器度思ひ計るべし」

神皇正統記の著者北畠親房

泰時北條氏第三代の執權義時の長子

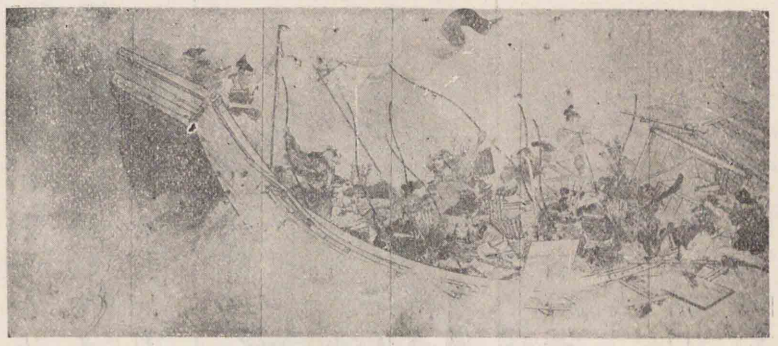
白石新井白石

時宗北條氏時頼の子相模太郎

との嘆美の辭を漏らせり。賴襄の如き勤王主義の鼓吹者も、北條氏の不臣を嚴咎すると同時に、その護國の大功を感謝するに、殆ど言葉の制限を打忘れたるほどなりき。要するに、北條氏の撫民の內政と强硬なる外交とは、兩つながら後世の龜鑑たり。豈たゞ時宗のみと謂はんや。

北條時宗（肥後滿願寺藏）

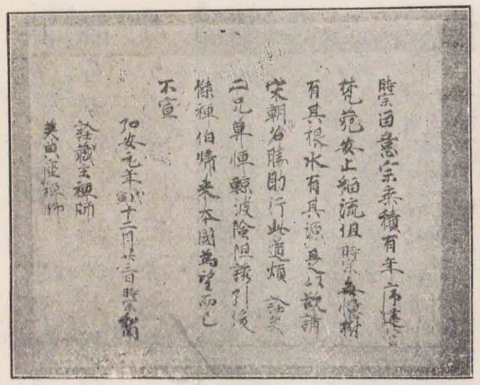
北條氏政治の要旨は精力集中主義なりき、精力保存主義なりき。名よりも實とは、彼等が一子相傳の祕訣なりき。彼等は虛名の甚だ無用なるを知れり。彼等はから騷の甚だ有害なるを知れり。彼等は被治者の利益を圖るは、治者の勢力を鞏固ならしむる所以なることを知れり。承久の亂は、我が歷史上未曾有の大變なり。しかも勝利者たる北條氏は、その戰利品を一



つも私するところあらざりき。彼等は少なくとも、治者の天職の一部分を解得し、且、これを實行したり。乃ち時宗の如きも、その一人たるのみ。「蒙古來吾不レ怖。吾怖レ關東令如レ山。直前斫レ賊不レ許レ顧」と。いかに北條氏の威信は徹底したるよ。賴襄のこの句、時宗が鎌倉を一歩をも出でずして、元寇を掃蕩したる消息を、囊括して遺憾なし。果然、時宗も好男子なるかな。

何人も熟知する如く、「蒙古來」の詩は山陽十八九歳の作にして、今時傳ふるところは、晩年聊か添足したるものなり。

筑海颶風連レ天黑。蔽レ海而來者何賊。蒙古

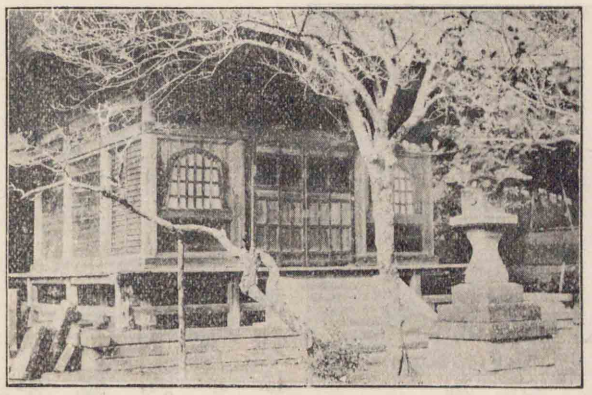


來來自レ北。東西次第期呑食。嚇得趙家老寡婦。持此來擬男兒國。相模太郎瞻如レ甕。防海將士人各力。蒙古來吾不レ怖。吾怖關東令如レ山。直前斫レ賊不レ許レ顧。倒吾檣登虜艦。擒虜將吾軍喊。可レ恨東風一驅附大濤。不レ使レ羶血盡膏日本刀。

藝術としての批判は、吾人の與り知るところにあらず。然れども、若し、我が國に國民の猛志を謠ひたる詩ありとせば、これはその隨一たらざるべからず。我が帝國の二千六百年來、金甌無缺の獨立國たる所以は、職として我が國民に、この元氣の存するに由る。而して德川氏の極盛時において、上下交泰の柔軟空氣に沈醉し、昏々然として、たゞ佚樂をこれ事としたる時においても、かくの如き血湧き

肉飛び筋張り骨怒るの雄快文字を唱へ來る。誰か詩人は時勢を識らずといふか。誰か文章國に益なしといふか。たゞこの一詩あり、賴襄以て不朽なるべし。國民としてその國を愛する、我が身を愛する如くならしめよ。經國の道多端なりと雖も、その要旨はかくの如きのみ。

時宗祠堂



記者この頃鎌倉に遊び、圓覺寺を訪ひ、いはゆる佛日庵の時宗祠堂に詣でたり。大船横須賀線の鐵路は、亂暴にも山門の下を横斷したれども、一たび山門に入れば山靜にして太古の如し。翠杉森々として天を刺し、以て人間の塵埃を隔て、萬竿束ぬるが如き修篁は、自然の墻壁をなして、山門を護す。大光明寶殿前の老柏樹は、幾多の星霜を睥睨して、宛も高僧の如くに立てり。これ豈開祖の手栽たらざるなきを得んや。幽徑登々、祠堂兀立す。英雄骨枯れて土に化するも、その呵雷役電の神魂は、長へに我が國民元氣の本尊たらんかな。（「精神の復興」に據る）

中學新國文　卷八　終

挿繪筆蹟　卷八

五頁　版本山家集
山家和歌集　上

春
立春の朝よみける
年くれぬ春くへしとはおもひねにまさしく見えてかなふ初夢
山のはのかすむけしきにしるき哉今朝よりやさは春の明ほの
春たつとおもひもあへぬ朝戸出にいつしかかすむ音羽山かな
たちかはる春をしれともみせかほに年をへたつる霞なりけり
とけ初るはつ若水の氣色にて春立ことのくまれぬるかな
家々に春を翫といふことを門ことにたつる小松にかさゝれてや
とてふ宿に春は來にけり
元日子日にて侍りけるに

子日してたてたる松にうへそへむちよかさぬへき年のしるしに

七頁　西行筆蹟
しめ〳〵といろますあめのふりそへは、ふかみとりなるのへの草かな
一三頁　(心)なき身にもあはれはしられけりしきたつさはの秋の夕くれ
一六頁　也有筆蹟
世をのかれたる前津の菴に老の春をむかへて
門に見る松やむかしの友ふたり
二一頁
萬歳やあふぎに月の松のうち　少年車容　夜半寫
春興　尾陽
鶯の魂をうはふか梅の月　曉臺
〃　浪花
鎌きたふ野鍛冶かうらや春の艸　二柳
〃　東都
くゝたちや老婆深切にもてなせり

二二頁　蓼太
澤山な月日が出來てうめのはな　士朗
蓮根のあなから寒し彼岸すぎ　菜翁醉筆
一〇〇頁　小野道風筆蹟
欺二遊客一空勸二提壺一不レ勸レ盃惜二殘春一
艶陽盡處幾相思招レ客迎レ僧欲レ展レ眉春入レ林歸猶晦迹老
一三〇頁
折れたまゝ咲いて見せたる百合の花　透谷
一四〇頁　藤原良經筆蹟
さむみこゑよはりゆくむしよりもいはてものおもふわれそまされる
一四一頁　藤原俊成筆蹟
私密の壹會　郭公
ほとゝきすなくひとこゑにあくかるるこゝろやそらにおくりつくらん

つき
月かけのきよみかせきにすみぬれは
おきのつりふねかすことにみゆ
ゆき
ふしのねもうつもれぬ

一四二頁 藤原雅經筆蹟

詠二山家時雨一和歌

侍從藤原雅經

かきくらししくれめくるやまのはを
やかてのきはにうちなかめつゝ

一六三頁

時宗留二意宗乘一積有二年序一建二
營梵苑一安二止縮流一但時宗每
憶樹有二其根一水有二其源一是以
欲下請二宋朝名勝一助中行此道上煩二
詮英二兄一莫レ憚二鯨波險阻一誘二
引俊傑禪伯一歸二來本國一爲レ望
而已不宣
弘安元年戊寅十二月廿三日　時宗
詮藏主禪師
英典座禪師

常磐中学校
岩場建一

昭和七年六月十日印刷
昭和七年六月十三日發行
昭和七年八月十二日訂正印刷
昭和七年八月十五日訂正發行

中學新國文
全十册

卷數	定價
一・二・三・四・五	各金六拾五錢
六・七・八・九・十	各金五拾五錢

著作權所有
不許複製

編者　笹川種郎

發行者　東京市神田區仲猿樂町三〇番地
株式會社帝國書院
代表者　增田啓策

印刷者　東京市牛込區山吹町一九八番地
山本禎男

發行所　東京市神田區仲猿樂町三〇番地
株式會社帝國書院
振替口座東京六七〇一四番

關西販賣所　大阪市東區横堀四丁目三番地
三宅莊藏書店
振替口座大阪六九番

宗文社印刷所印刷

第十

岩崎書店